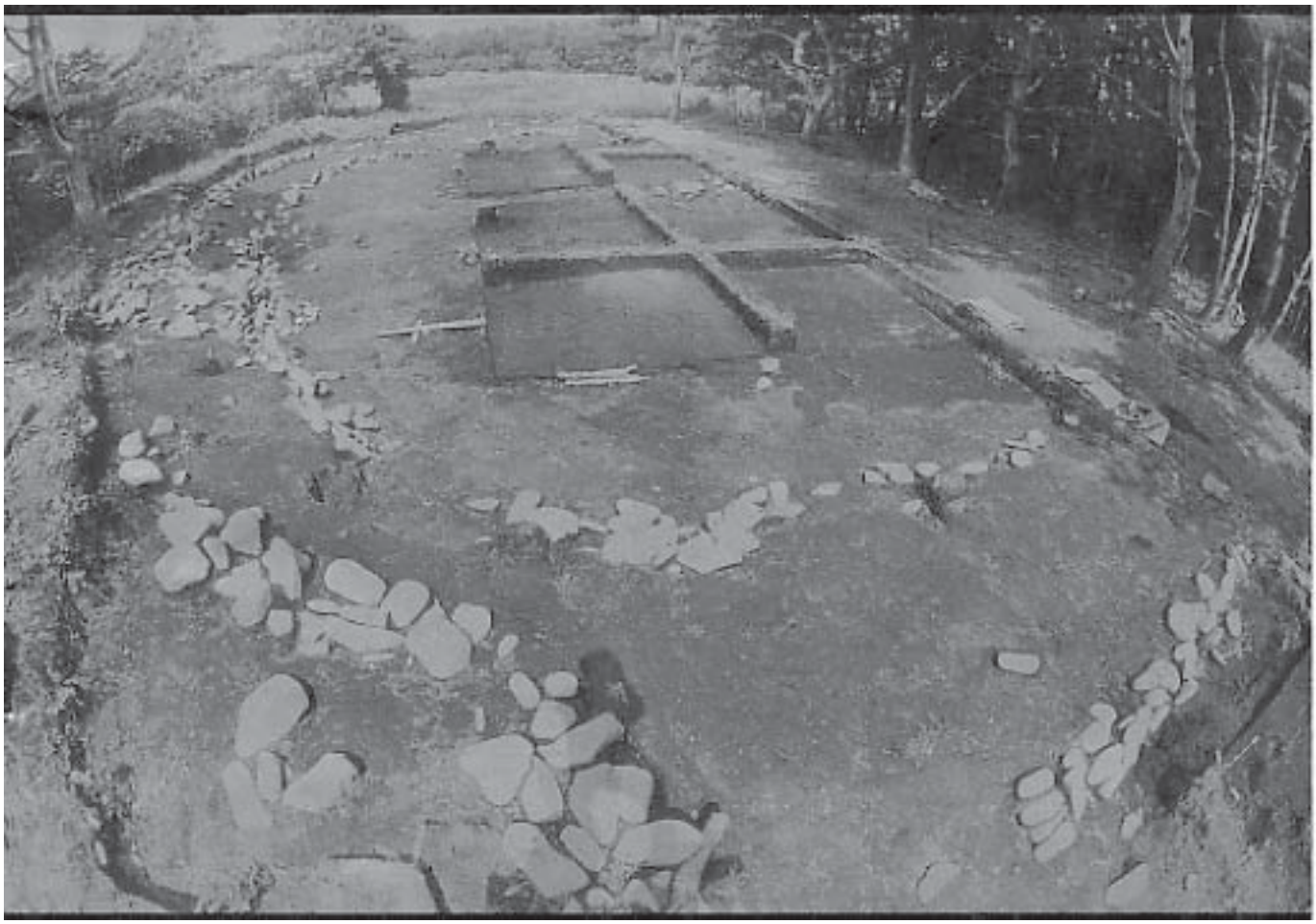
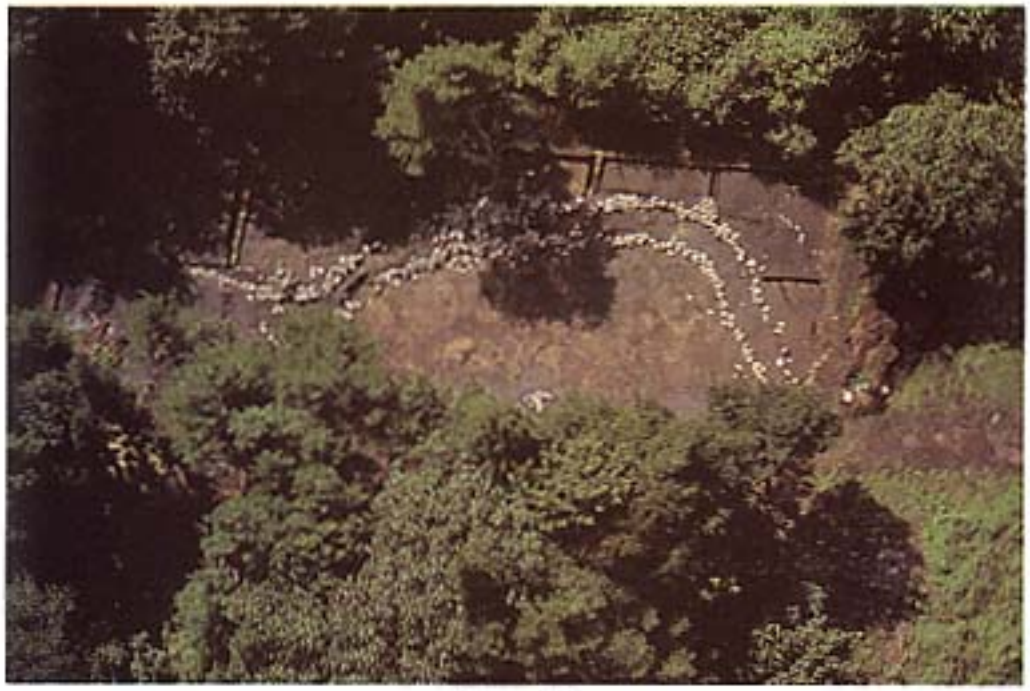
青森市埋蔵文化財調査報告書　第20集

小牧野遺跡　発掘調査概報



平成4年度

青森市教育委員会



全　　景

近　　景

特殊組石

配　　石

序

青森市教育委員会では、平成2年度から市内野沢に所在しております「小牧野遺跡」の発掘調査に取り組んできております。

本遺跡は、平成元年度に地元青森山田高等学校考古学研究会の手により発掘調査が実施され、極めて保存状態が良好でかつ、全国的にも類例のみられない特異な配石による環状列石の一部を検出し、翌平成2年度から埋蔵文化財係を新設した当委員会が遺跡の保存・活用を前提とし国・県からの補助金交付を受け、重要遺跡確認緊急調査として調査してきております当市を代表する貴重な遺跡であります。

これまで、3箇年の調査で環状列石の全体像は、ほぼ検出することができましたが、縄文人の英知と技術のすばらしさには、ただただ感心させられてまいりました。

今後は、この環状列石という大土木工事に携った彼らの居住区を把握し当時の「小牧野村」の全容を解明すへく、さらには国の史跡指定実現を目指し、生きた歴史学習の場としてより多くの方々に活用していただけるよう保存・整備の構想を検討しながら、平成5年度も調査を継続する予定であります。

本書は、これまで3箇年次にわたり調査してまいりました成果を中間報告としてダイジェスト版的にまとめたものであります。

本書が研究者はもとより写くの方々にとりまして、環状列石の謎解明並びに当市の歴史を紐解く鍵として、さらには文化財保護啓蒙にいささがでも役立つことができますよう念願しております。

最後となりましたが、ここに本書を刊行することができましたことは、文化庁・県教育庁文化課はもとより小枝野遺跡発掘調査会の会長並びに各委員の方々をはじめ書くの関係機関・各位のご指導、さらには野沢町会はじめ地元町会各位並びに土地所有者各位のご協力の賜ものによるものと、ここに深く感謝の意を表する次策であります。

平成5年3月

青森市教育委員会

教育長　花　田　陽　悟

例　　言

1．本書は平成2年度から発掘調査を実施している青森市野沢字小牧野に所在する「小牧野遺跡」の発掘調査概要書である。

2．本書は平成2年度から4年度までの発掘調査の概報であり、代表的な遺構・遺物を掲載した。なお、発掘調査報告書は平成6年度に刊行予定である。

3．発掘調査及び本書作成は、国・県の補助金交付を受けて実施したものである。

4．本書の執筆・編集は、文化庁・県教育庁文化課・小牧野遺跡発掘調査会委員の指導を受け青森市教育委員会が行い、第Ⅰ章中「遺跡周辺の自然環境」・第Ⅱ章中「石はどこから」は、小牧野遺跡発掘調査会委員工藤一彌氏より玉稿を賜り、策Ⅱ章中「縄文土器」・「土製品・石製品」を永井治、その他を上野隆博が執筆した。

5．本文中及び図版・表において使用した略称・記号・スクリーントーン等の表示内容は次のとおりである。　　土ー土壙

目　　次

序
例　言
目　次
第Ⅰ章　遺跡の位置と調査の概要……1
遺跡の位置と周辺の遺跡……1
調査に至る経過……3
遺跡周辺の自然環境……3
調査要項……4
調査の概要……5
第Ⅱ章検出　遺構と出土遺物……6
環状列石……16
石はどこから……13
環状列石周辺部の遺構……15
縄文土器……23
続縄文土器……33
石器……40
土製品・石製品……44
まとめ……48

第Ⅰ章　遺跡の位置と調査の概要

Fig1　遺跡空中写真

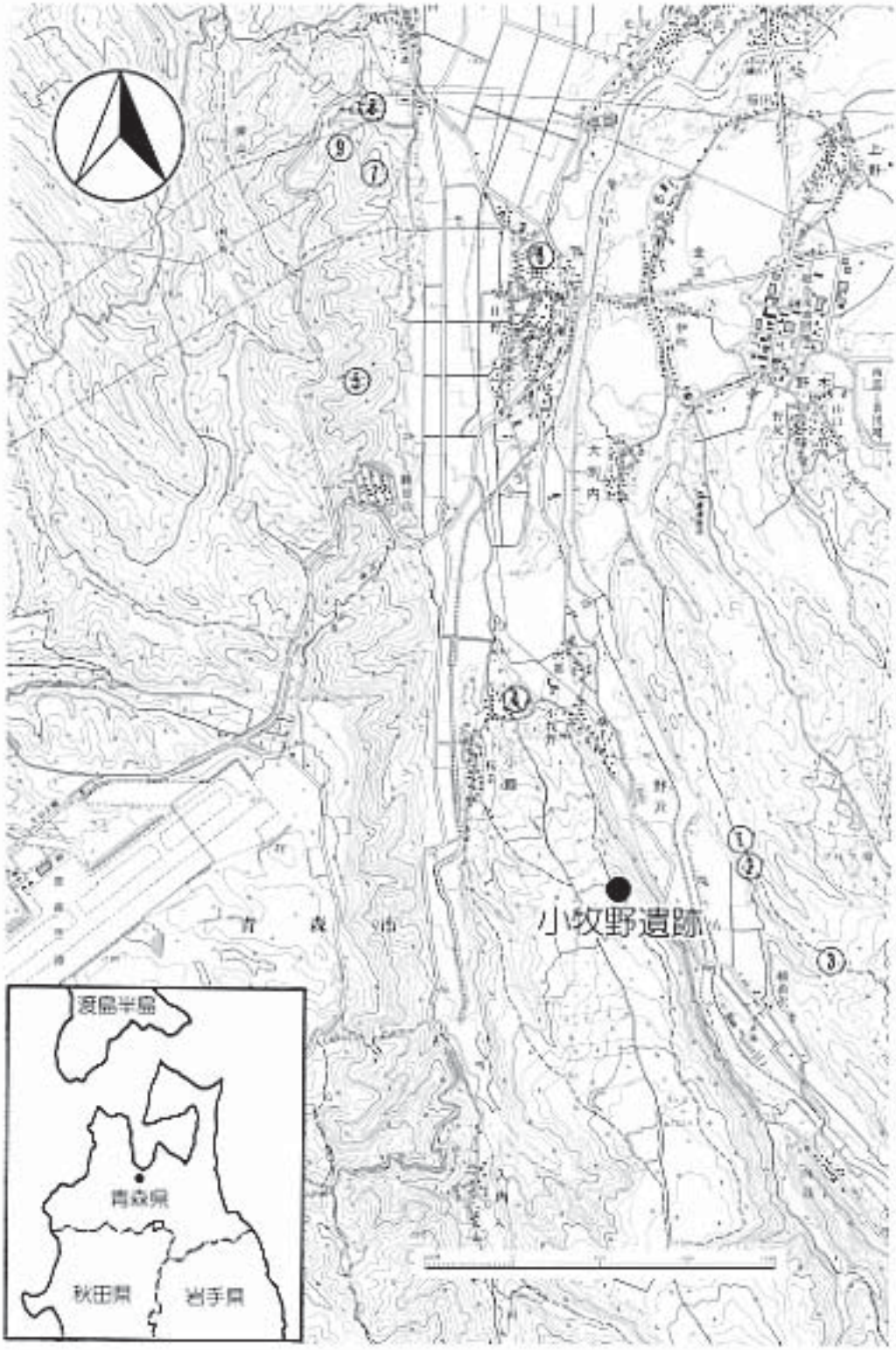
遺跡の位置と周辺の遺跡

青森市の地形は、陸奥湾に面した北側の平野部と、それを囲むように位置する東・西・南側の山岳丘陵地帯からなっています。特に南方には八甲田連峰がそびえ、その裾野付近からは、青森平野に向かって幾条もの細長い低丘陵が突き出ています。

小牧野遺跡は、市街地から南方およそ10㎞離れた、荒川と入内川に挟まれたこの低丘陵地上に位置しています。遺跡周辺の地形は、南北方向では比較的平坦であり、東西方向では西高東低のなだらかな斜面で、東端は荒川によって形成された比高差約50㎜の急な崖になっています。標高はおよそ146㎜で、遺跡からは青森平野や陸奥湾を一望することができます。

この台地は江戸時代から馬の放牧場として使用され、「小牧野」の名はそのことに由来し、環状列石中心部の地表には、嘉永7年（1854年）の年号が刻まれた馬頭観音碑が建っています。また、この馬頭観音碑の周囲は、大きな河原石が地表に散在していることから通称「石神平」と呼ばれています。

周辺の縄文時代の遺跡を見ると、東側の丘陵地上には、山吹（1）・（2）・（3）遺跡が位置しています。特に、山吹（3）遺跡は、縄文時代中期末から後期初頭と思われる直線状の配石遺構が確認されています。また、北西の丘陵地に位置する朝日山（1）遺跡は、縄文時代後期と晩期のおびただしい数の墓跡が見つかっています。それぞれ本遺跡を語るには重要な役割を占めるものと思われます。



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

調査に至る経過

本遺跡付近一帯は、以前から丘陵地上にもかかわらず、地表面に大きな河原石が散在していること、また、周囲の畑地から縄文時代後期初頭の土器が表面採集できることなどから大規模な配石に関する遺跡があるのではないかと考えられていました。そして、平成元年度に青森山田高等学校の考古学研究会が同校の葛西励・高橋潤両教諭の指導のもと、学術発掘調査を行った結果、保存状態が極めて良好な全国にも類例のない特殊な環状列石の約半分を発見することができました。翌平成2年度から、本遺跡の発掘調査を青森市教育委員会が引き継ぎ、遺跡の重要性から発掘調査の万全を期するため調査会を組織し、調査を進めて行くことにしました。

遺跡周辺の自然環境

遺跡周辺の地形は、ほぼ三角形の青森平野とそれを取り囲む丘陵地からなっています。西部の丘陵地は標高50～200㎜で開析が進み、平坦面はあまり残つていません。この丘陵地と青森平野との間には南北に伸びる「入内断層」があり、青森平野の形成に大きな影響を与えました。南部の丘陵地は八甲円山から続くもので、八甲田カルデラ（田代平カルデラ）が噴出物の八甲田火砕流堆積物（田代平溶結凝灰岩）でできている平坦面です。この堆積物は荒川中流や駒込川中流などで見ることができます。八甲田山から南西方向に伸びるこの平坦面は緩やかに傾斜し構内～幸畑付近から青森平野に没しています。

本遺跡は平坦面の未端部に位置し、平野部に対し、傾斜した丘陵地ガ舌状に突き出した形になっており、東は荒川、西は入内川に挟まれています。遺跡の基盤の地層は遺跡内には見えませんが、付近の調査から八甲田火砕流堆積物と考えられ、その上に月見野火山灰と呼ばれる黄褐色火山灰が重なっているものと考えられます。

第1表

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代	備　考
1	山吹（1）遺跡	大別内字山吹	集落跡	縄文中期	平成2年度発掘調査
2	山吹（2）遺跡	大別内字山吹	散布地	縄文	
3	山吹（3）遺跡	大別内字山吹	散布地	縄文中・後期	配石遺構を伴う
4	小　館　遺　跡	小館字桜刈	館　跡	中世	
5	高田蝦夷館遺跡	高田字朝日山	館　跡	中世	
6	高　田　城　跡	高田字日野	館　跡	中世	
7	朝日山（1）遺跡	高田字朝日山	集落跡	縄文～中世	縄文後・晩期の墓域
8	朝日山（2）遺跡	高田字朝日山	集落跡	縄文・平安	
9	朝日山（3）遺跡	高円字朝日山	集落跡	縄文・平安	

調　査　要　項

1．調査目的

平成元年度に実施した本遺跡の学術発掘調査において、保存状態が極めて良好な環状列石の一部を検出することができた。この環状列石は、良好な保存状態であると同時に個々の配石の組み合わせ方が全国的にも類例のない特異性が認められ、環状列石の意義並びに当時の社会を知る上で貴重な存在である。

この学術上貴重な環状列石を主体とする小牧野遺跡の発掘調査を実施し、遺跡の解明及び保存を図り地域社会の文化財活用に資する。

2．遺跡名及び所在地　小牧野遺跡　青森市大字野沢字小牧野 54 － 192 他

3．調査主体者　　青森市教育委員会

4．調査体制

遺跡の重要性及び将来の遺跡保存の観点から、調査の万全を期するため調査会を組織して臨むことにする。

調査会の名称は「小牧野遺跡発掘調査会」とする。

調査会組織

調査会長		大高　興	青森市文化財審議会会長	（考古学）
委　員	調査指導員	村越　潔	弘前大学教授	（考古学）
	〃	小林　達雄	国学院大学教授	（考古学）
	調　査　員	三辻　利一	奈良教育大学教授	（分折化学）
	〃	小山　陽造	八戸工業高等専門学校教授	（分折化学）
	〃	諸戸　靖史	八戸工業大学教授	（土木工学）
	〃	葛西　励	青森山田高等学校主事教諭	（考古学）
	〃	高橋　潤	〃　教諭	（考古学）
	〃	工藤　一彌	青森県立黒石高等学校教諭	（地質学）
	〃	秋元　信夫	鹿角市教育委員会主任	（考古学）
	調査協力員	渡辺　久男	地元野沢町会長	
事務局　青森市教育委員会				
	教　育　長	花円　陽悟		
	理事・教育次長	工藤　昌保	（現　青森市総合福祉センター館長）	
	〃	菊池　勇孝	（現　青森市建設部長）	

理事・教育次長　　阿部　祐之助
社会教育課長　　寺沢　松三郎
同課長補佐　　久世　満正　（現　青森市森林博物館長）
〃　　石田　弘則
〃　　遠藤　正夫　（調査担当）
同　主　査　　広瀬　賢治　（現　学務課主査）
同　主　事　　武田　　均　（調査担当）
〃　　上野　隆博　（　　〃　　）
調査補助員　　後藤　久志・桃元　宏之
永井　　治・金山　晃道

調　査　の　概　要

〔平成２年度〕
調査目的　環状列石中央平場内の精査と「つの状」列石周囲の調査
期　　間　平成２年８月２日～９月７日
調査面積　280 ㎡
検出遺構　配石遺構等
出土遺物　ダンボール１箱分
〔平成３年度〕
調査目的　東側未調査部分の環状列石の検出と続縄文時代の遺構確認の調査
期　　間　平成３年７月11日～９月６日
調査面積　850 ㎡
検出遺構　特殊組石・配石遺構等
出土遺物　ダンボール６箱分
〔平成４年度〕
調査目的　環状列石周辺部の遺構配置と居住区域確認の調査
期　　間　平成４年７月７日～９月18日
調査面積　650 ㎡
検出遺構　土壙・柱穴状ピット・集石遺構・焼土遺構・竪穴遺構等
出土遺物　ダンボール25箱分

第Ⅱ章　検出遺構と出土遺物

環　状　列　石（第２図）

縄文人は、いろいろな構築物に石を盛んに使用しています。持に縄文時代中期から後期の時期には特殊な巨石文化が突知として現れ、東北地方北部を中仙にして東日本全域に、特に石を使用することが目立ち、小さな石から大人4、5人でも持ち上げられないような大きな石を並べたり、組み合れせたりする配石遺構が数多く作られています。これらの配石を環状に配置したものを環状列石（ストーンサークル）と呼び、大きなものでは直径30～40㎜になるものも存在します。青森県内では本遺跡の他に、弘前市大森勝山遺跡、三戸町東山遺跡などから見つかっており、全国的には国の持別史跡でもある秋田県鹿角市大湯環状列石が古くから知られています。

また、縄文時代後期には特殊な埋葬方法が出現します。一般的な墓の形態は、地面を掘り窪め、その中に遺体を埋葬する方法ですが、この時期には、偏平な石を箱形に組んで、その中に遺体を埋葬する「石棺墓（せっかんぼ）」、一度土中に埋葬し、その後骨を取り出しきれいに洗ったのち、甕棺（かめかん）土器と呼ばれる埋葬用の土器に入れ、再び埋葬するという「再葬甕棺墓（さいそうかめかんぼ）」といった埋葬風習が現れます。青森市山野峠遺跡では石棺墓の中に甕棺土器が安置されていたことから、遺体を石棺墓に埋葬したのち、骨を甕棺墓に移し変えたと考えられています。

Fig2　配石の方法

環状列石の構築目的はさまざまな説があり、縄文人の「墓」「祭祀の場」「日時計」「天体観測の場」などありました。現在では墓説と祭祀の場説が有力ですが、結論はいまだだされていません。しかしながら、大湯環状列石周辺部の配石遺構や岩手県滝沢村湯舟沢㈱㈱遺跡の環状列石特殊組石下部から人間のものと思れれる脂肪酸が検出されたことなどがら、祭祀の場を含めた墓説が有力となっています。

小牧野遺跡から見つかった環状列石は、出土土器などから判断すると会がら約4000年前、縄文時代後期前半に作られたものです。列石は、大人10人でも持ち上げることができない巨石を用いた直径3㎜の配石を中心に配置し、その外側に50～60㎝の大きな石約2000個使った二重の輪を巡らせた三重構造になつています。外側の輪（外帯）の直径は約35㎜、内側の輪（内帯）の直径は約29㎜と非常に大規模なものです。また、列石から3本の「つの状」の直線的な列石が伸びています。

本遺跡の環状列石の特徴は、列石の組み方と列石を作るために台地の斜面を大規模に整地していることです。

主体となる組石は、細長い大きな石を縦に置き、その左右に偏平な石を石垣状に3～6個積み重ねるという方法をとっており、この繰り返しで外側の二重の輪を作り出しています。そして、その周囲に特殊組石を所々配置しています。このような組み方は全国的にも例がなく「小牧野式」と呼ばれる特殊な形態です。

環状列石の構築方法は、斜面の高い部分を削り、その削り取った土を低い部分に盛り土をして皿状のくぼ地を作り出し、その整地した傾斜面に石を立体的に配置していくという方法をとっています。さらに、環状列石より高い側からは列石は見えず、低い側からでないと列石の状態が確認できないという特異な形態をとっています。また、中央の平坦面（平場）は、全体がかたく踏み固められています。この平場からは遺物がほとんど出土せす、特に石鏃などの狩猟関係の遺物は貝つがつていないことから、この平場は特別な場ではなかったかと考えることができます。これらの大土木工事は、小牧野集落の人々だけではなく、周辺の集落の人々たちも含めた共同作業によって行われたものと思われます。

また、本遺跡の環状列石の内帯と外帯の間から、土中に埋められた3個の甕棺土器が見つかっています。このことは環状列石の性格を表す貴重な材料であり、墓説を有力にするものです。さらには、石棺墓・再葬甕棺墓・環状列石など当時の埋葬形態の関係をうががわせるものであります。

現在までの調査は、主に環状列石全体を露呈する調査を進めてきたため、特殊組石下部の調査はまだ行っていません。今後の調査では下部調査を行い、環状列石の性格を見極めていきたいと考えています。

Fig3 瀬戸内海

配石⑧

配石⑨

配石⑩

配石⑪

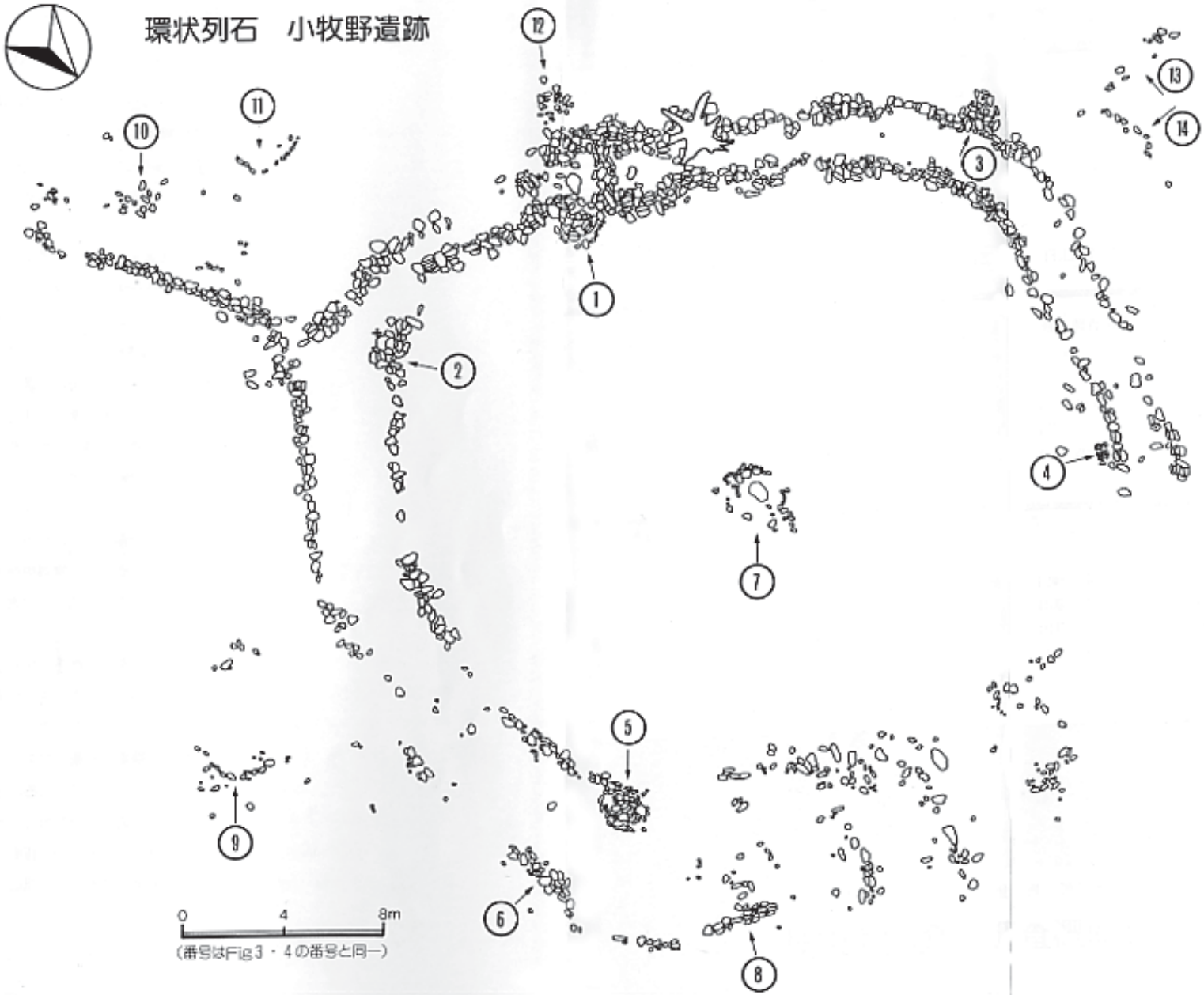
配石⑫

配石⑬

配石⑭

特殊組石⑮上面

Fig4　配石遺構



第2図　環状列石実測図

石　は　ど　こ　か　ら

環状列石を形作っている石の総数は2000個にもなるといいます。その石はいったいどこから運んできたのでしょうか。そのためには石の種類を調べなくてはいけません。調べた結果、石の大部分は安山岩でした。その他には石英安山岩が100個ほどありました。これらの岩石はいずれも火成岩であり、堆積岩や変成岩はありませんでした。では、どこに安山岩や石英安山岩があるのでしょうか。

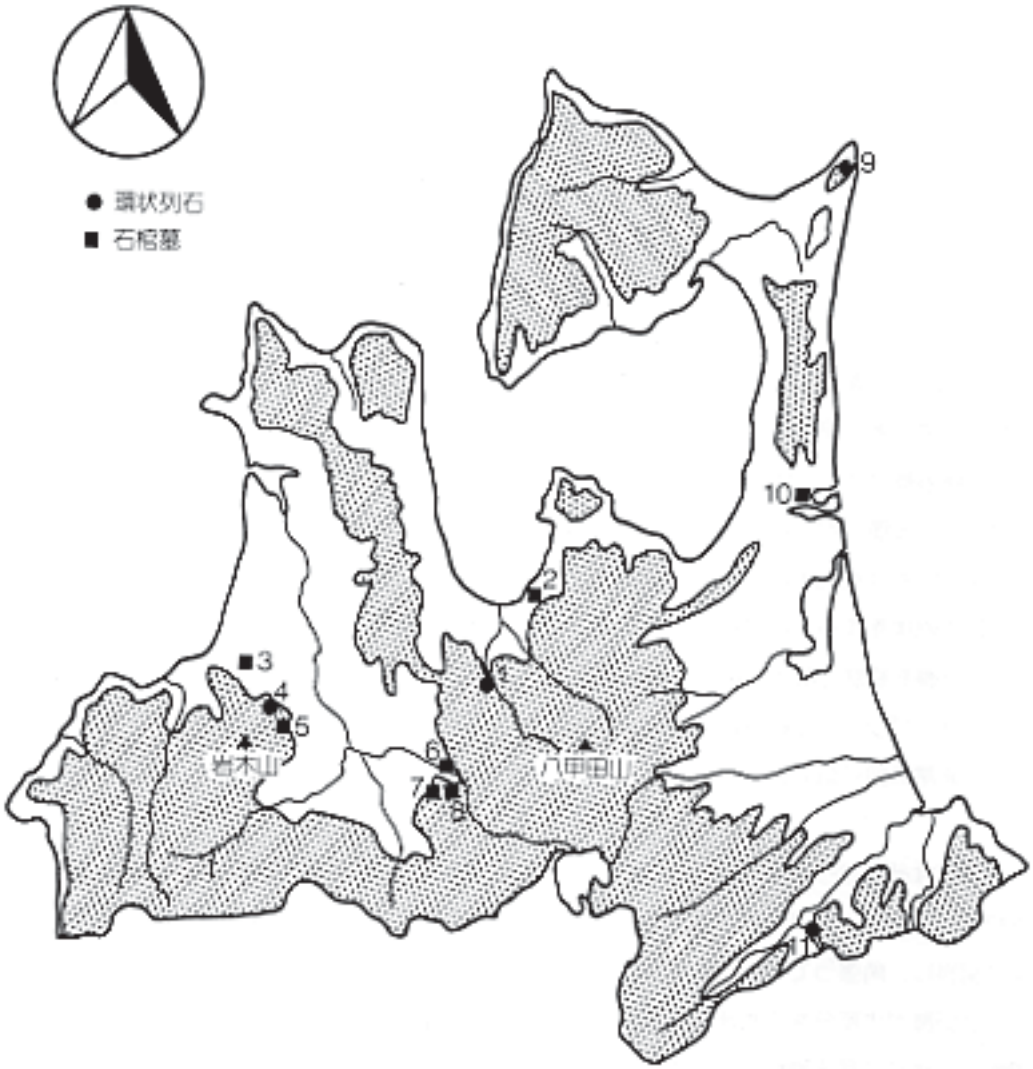
安山岩は学名をAndesite（アンデサイトと読む）というようにアンデス山脈の石という意味ですから、環太平洋火山帯に特徴的な火山岩です。青森県では八甲田山や岩木山などが安山岩でできています。環状列石の安山岩は含まれている鉱物から両輝石安山岩に分類されますが、その岩相は多少異なっており、ガス孔のある安山岩、細粒で結晶粒のほとんど見えない安山岩、肉限でもはっきり輝石や角閃石の斑晶がわかる典型的な安山岩、風化が進みボロボロな安山岩など多種多様です。八甲田火山は南と北に二分されますが、多くの火山体からなる、複雑な成層火山で、多種の安山岩から構成されています。距離的にも最も可能性が高いと言えます。

石英安山岩は安山岩に比べて、少し珪酸分が多いため、そのマグマは粘性が大きく、火山よりも貫入岩体を作ることが多い岩石です。また、柱状節理をつくることが多いため、風化によってできた礫も柱状となることが多く、遺跡付近では荒川上流城ヶ倉付近に産出します。

岩石プレパラートの顕微鏡観察では、安山岩は八甲田山のものと石英安山岩は城ヶ倉付近のものと非常に良く似ていました。以上のことから、石の産地は八甲田山と城ヶ倉と推定されます。

それではどこから運んだのだろうか。それは石の円磨度から推定できます。石は原産地から離れると、侵食、運搬作用によってしだいに丸みを帯びてきます。環状列石の石は円礫～亜円礫に相当し、角張っているものはほとんどありません。長径が60㎝ほどのものが多く、礫の分類では巨礫が大部分を占めます。遺跡の東側と西側の河川を調べてみると、西の入内川はその規模も小さく、河床礫も小さいものが考く、大きなものは少し角張つています。東の荒川は水量も多く、大きな礫も多く、環状列石に良く似たｓ礫がたくさんあります。荒川の上流には城ヶ倉や八甲田山もあり、遺跡近くの河床でも、環状列石と同じような礫が見つ方ることから、古代人は遺跡近くの荒川から形や大きさなど用途にあったものを選んで運んで来たものと推定できます。

青森県内の環状列石と石棺墓



1　小牧野　（青森市）
2　山野峠　（青森市）
3　餅の穴　（鰺ヶ沢町）
4　大森勝山　（弘前市）
5　高長根山　（弘前市）
6　花　巻　（黒石市）
7　掘合Ｉ号　（平賀町）
8　掘合III号　（平賀町）
9　札　地　（東通村）
10　弥栄平（4）（六ヶ所村）
11　泉　山　（三戸野）

第３図　遺跡位置図

環状列石周辺部の遺構（第５～７図）

平成４年度の調査は、主に環状列石周囲の遺構配置及び居住区域の把握ということを目的に進めました。

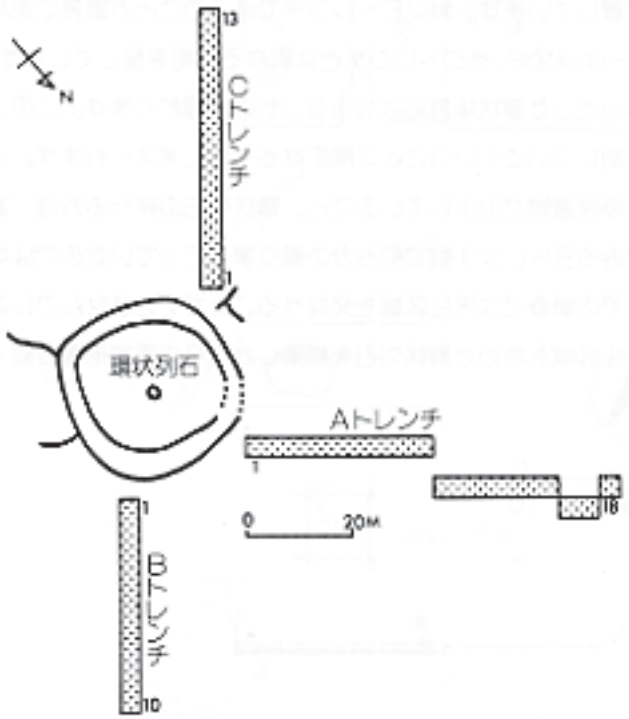
縄文時代の集落構造の一つに環状集落があります。中心に円形広場を配置し、同心円状に墓域や住居域を巡らすというバームクーヘン状の集落形態です。八戸市風張（1）遺跡や岩手県西田遺跡などがこのタイプの集落を代表するものであり、大湯環状列石では、列石を中心に掘立柱建物跡や土壙群が巡り、その外側に住居域が広がっています。

本遺跡では、列石を中心に長さ40～70mの３本のトレンチを設定し、それぞれA・B・Cトレンチと名づけ調査を進めました。ただし、遺構の調査は時期確認のための半裁までの調査で止めており、土壙などの平面図は確認面での推定範囲です。

検出した遺構は、土壙・柱穴状ピット・焼土遺構・集石遺構・竪穴遺構などが見つかりましたが、住居跡は確認することができませんでした。

土壙は全トレンチから総計43基見つかり、Bトレンチでは十数基の土壙が群をなしています。平面形は長軸80～120cmの楕円形のものが主体を占め、また、フラスコ状のものも見られます。土壙上面または底部に大きな石を置いたものが目立ち、フラスコ状土壙の上面には、こぶし大の石を使った円形の配石が配置しているもの（1土）がありました。また、粘土で埋め返した土壙（3，5・6土）や焼土を上面にかぶせているもの（29土）なども見つかっており、第6号土壙では黒土を底面に敷き、焼土の混じった粘土で埋め返していました。

土壙からの出土遺物は、土器片・甕棺土器の□縁部・石鏃・三角形岩版・靴形土製品などが見つかっているものの、全体量としては極少量です。見つかっている土器片から、ほとんどの土壙は環状列石と伴う時期のものであり、その多くは土壙墓であると思われます。



第４図　トレンチ配置図

柱穴状ピットは環状列石に近接する地点で見つかりました。前述しましたが、大湯環状列石でも掘立柱建物跡の柱穴群が見つかっており、本遺跡の場合もこれに類似していますが、4m幅のトレンチであったため、ピット群の配置関係までは把握することができませんでした。ただし、この多くは、掘立柱建物跡と関連しているものと思われます。

焼土遺構はAトレンチから小規模のもの3基・Bトレンチから中規模のもの1基見つかりました。すべて下部には土壙はありませんでした。

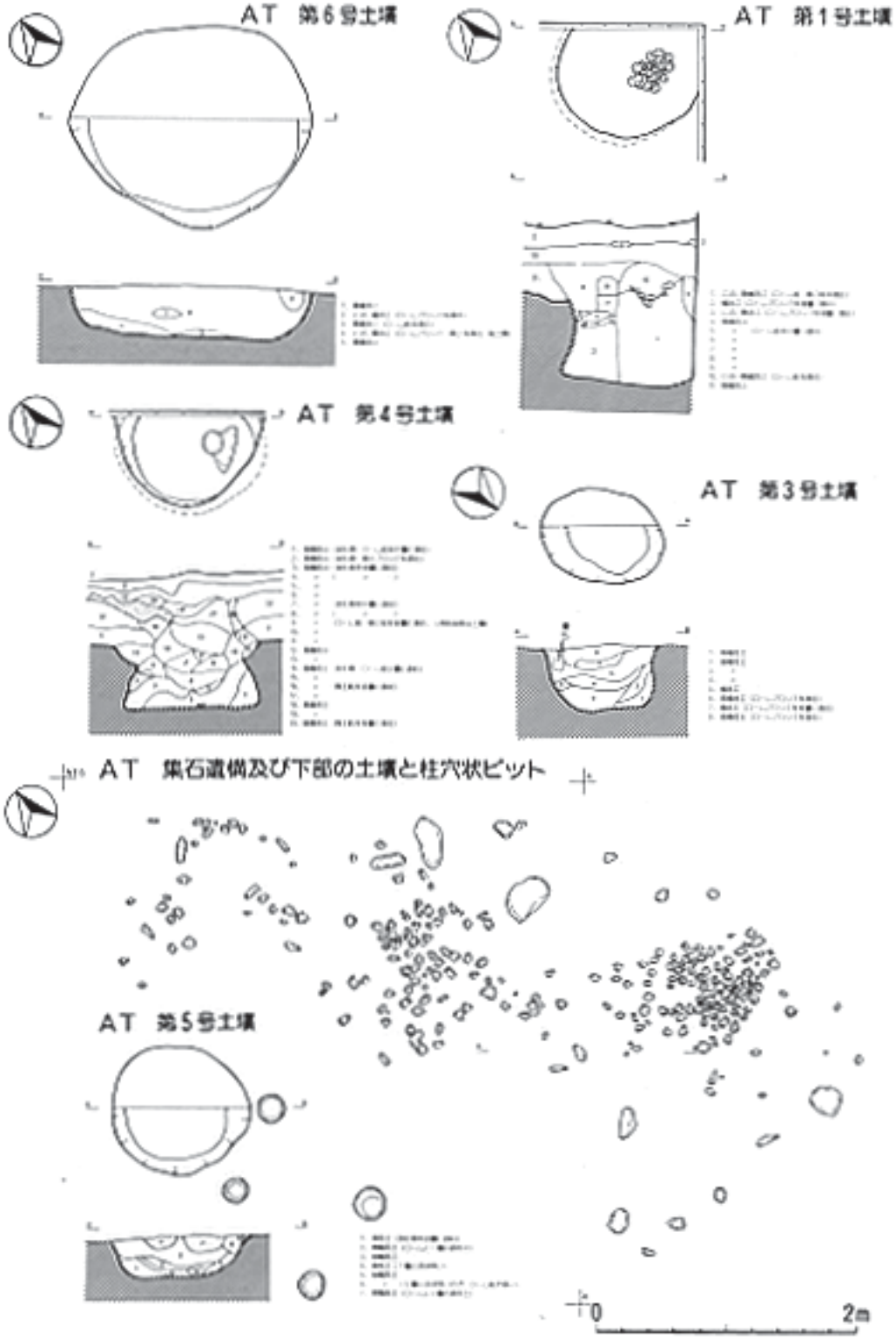
集石遺構はAトレンチから2基隣接して見つかりました。それぞれ80～90個のこぶし大の石で作られており、下部より粘土で蓋をした土壙（5土）と4基のピットが見つかりました。自然礫が大半ですが、さまざまな石器も使われており、くぼみ石・すり石・たたき石・石斧・岩版などがありました。

竪穴遺構はCトレンチから1基見つかりました。比較的環状列石から離れており、形態はすり鉢状で、直径約4m、深さ約1．5mあります。縄文時代後期より古い土器（円筒土器）が底面から見つかっており、構築時期は環状列石より古いと考えられます。ただし、十腰内Ⅰ式土器を含む粘土質の土で覆われており、廃絶後、再利用されたものと思われますが、性格は不明です。

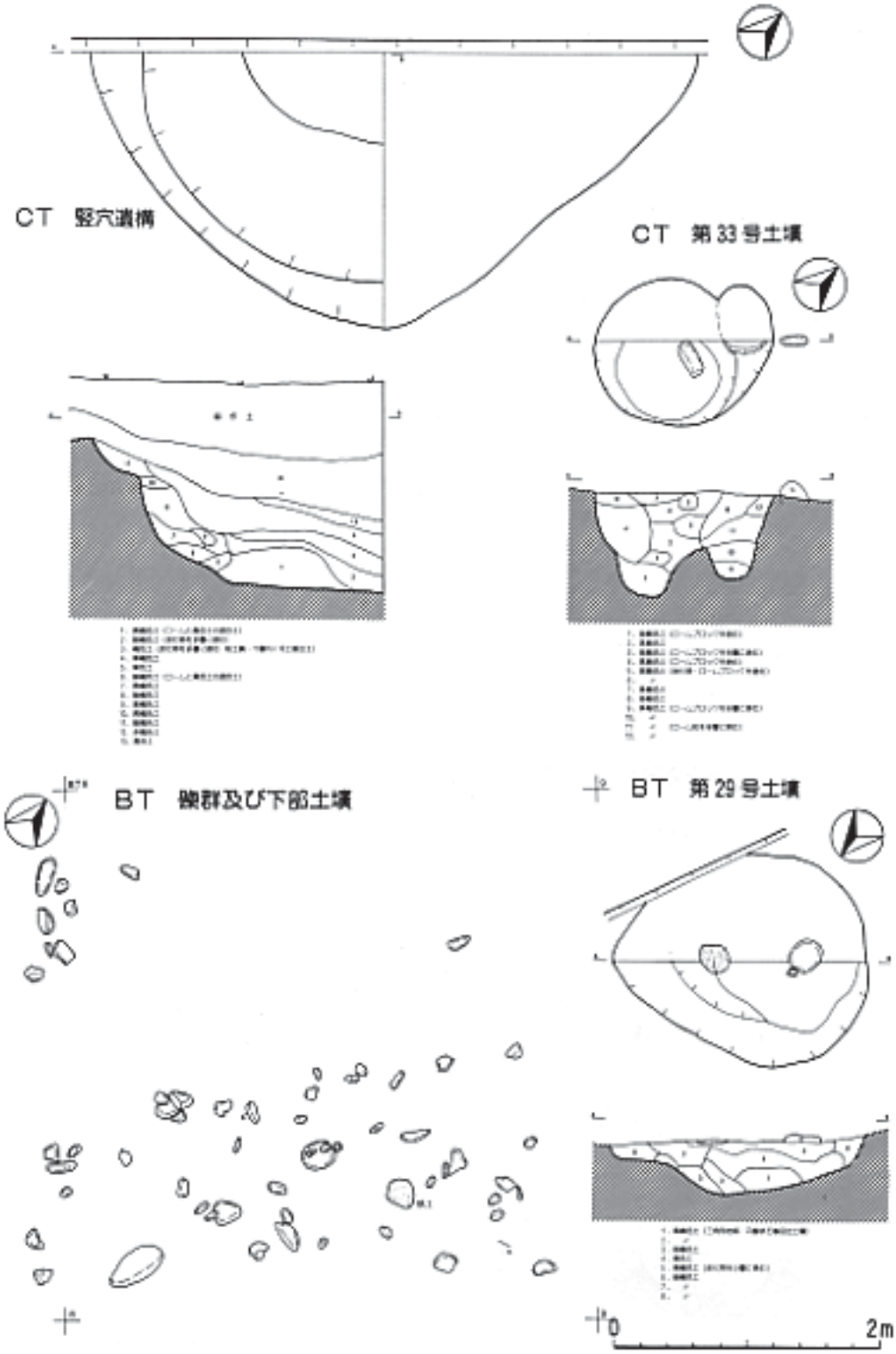
全体の遺構配置を見ると、A・Bトレンチでは環状列石から15m以内には柱穴状ピット群と深めの円筒形またはフラスコ形の土壙が位置し、15～20mでは遺構は存在せず、30m～40mでは小判形の比較的浅めの土壙群が位置しています。特にBトレンチではこのことが顕著に現れています。Cトレンチは柱穴状ピットは少なく、他のトレンチとは異なる様相を呈しています。

これらから、本遺跡は環状列石を中心とした環状集落にはならないものと思われます。このことは、台地の縁ぎわに環状列石が立地しているということに関係するものと考えられます。さらに、Bトレンチから多量の土器や特殊遺物が出土していること、環状列石の見せる方向、遺構の密度などから、環状列石を仰ぎみるBトレンチ側で何らかの祭り事を行っていたのではないでしょうか。また、平成4年度までの調査では居住区域を発見することができませんでしたが、今後調査が進むことによって居住区域を含めた環状列石を構築した人々の集落形態が見えてくるものと思われます。

第5図 遺構配置図


AT 第6号土壙
AT 第1号土壙
AT 第4号土壙
AT 第3号土壙
AT 集石遺構及び下部の土壙と柱穴状ピット
AT 第5号土壙
0
2m

第6図 検出遺構（1）

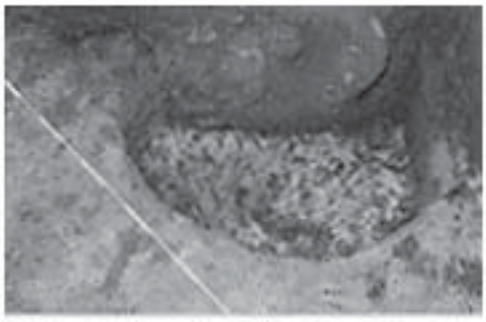


第7図　検出遺構（2）

Aトレンチ遺構配置（E→W）

Aトレンチ遺構配置（S→N）

第1号土壙上面の配石

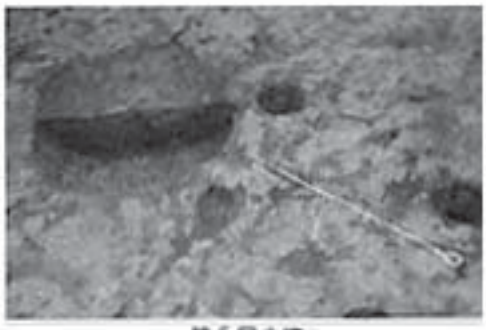


第1号土壙

第6号土壙

第4号土壙

集石遺構



第5号土壙

Fig5　検出遺構（1）

Bトレンチ柱穴状ピット群

Bトレンチ土壙群

第14・15・16号土壙

第29号土壙

第29号土壙出土遺物（三角形岩版・円盤状石製品）

第24号土壙出土遺物（靴形土製品）

第33号土壙

竪穴遺構

Fig6　検出遺構（2）

Fig7 出土土器

縄　文　土　器（第8～11図）

今回の発掘調査で見つかった土器の量は、ダンボールで約20箱分が見つかりました。縄文時代前期（今から6000～5000年前）・中期（今から5000～4000年前）・後期（今から4000～3000年前）・晩期（今から3000～2300年前）の土器が見つかりました。その中でも前期・中期・晩期の土器（13・14）は、数片しか見つからず、ほとんどが後期の土器です。

13は前期の初め頃に位置付けられている、芦野第Ⅰ群土器と呼ばれる土器の底部です。

14は中期の円筒上層d式土器と呼ばれる土器の胴部です。

環状列石を造った人々が使用したと思われる土器は、後期の初め頃に位置付けられている、十腰内Ⅰ式土器といわれる土器です。

十腰内Ⅰ式土器は、弘前市の十腰内遺跡から見つかった土器に付けられた型式名で、古い順に十腰内Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式に分けられ、東北地方の後期の型式を代表するものです。十腰内Ⅰ式土器は、沈線文・磨消縄文という施文方法と器形が多様化するのが特徴です。

今回の調査で見つかった十腰内Ⅰ式土器は、大型と小型の深鉢形土器（2，3）・浅鉢形土器（5）・台付き鉢形土器（10）・壺形土器（4）・注口土器（7）・甕棺土器（1）などがありました。これらの中には、器表面に朱を塗っている土器（9）、浅鉢形土器の底面に沈線で施文したもの（5）などがあります。この文様は地域によって多少のちがいがあると思われますが、本遺跡からはこの文様が数多く見つかっています。また、蓋として使用したのか、土器の底部に

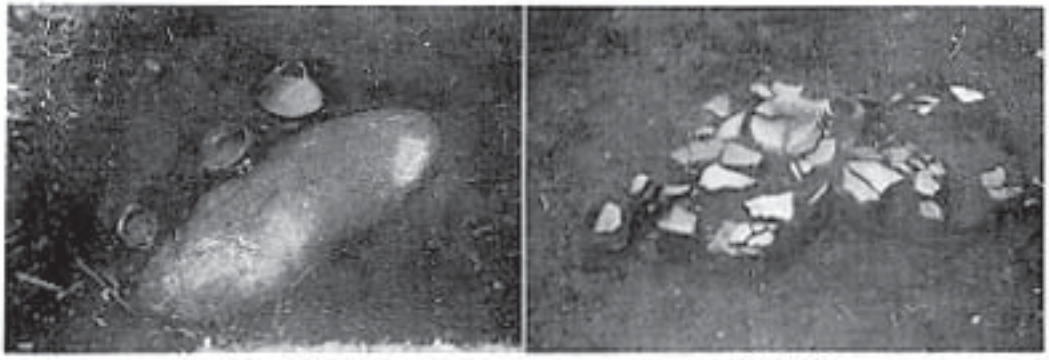
一対の穴をあけた土器（11）も見つかっています。

注口土器は磨消縄文を施文した壺形の土器に注ぎ口を付けた土器です。本県では極めて珍しく、ほとんど見つかっていません。器形は少しちがいますが、同じ十腰内㈱式土器が見つかっている、大館市の塚の下遺跡で見つかっています。

甕棺土器は再葬用に使用される特殊な土器で、独持な文様と器形、頸部の把手などが特徴です。これまでに、環状列石の内帯と外帯の間から、埋設された状態で3個体見つかっています。今回の調査では、外帯の外からかなりの甕棺土器の破片が見つかり、その中からCT4から見つかった1個体が復元でき、器表面には朱が塗られていました。また、見つかった破片の量から、複数の甕棺土器があったと思われます。

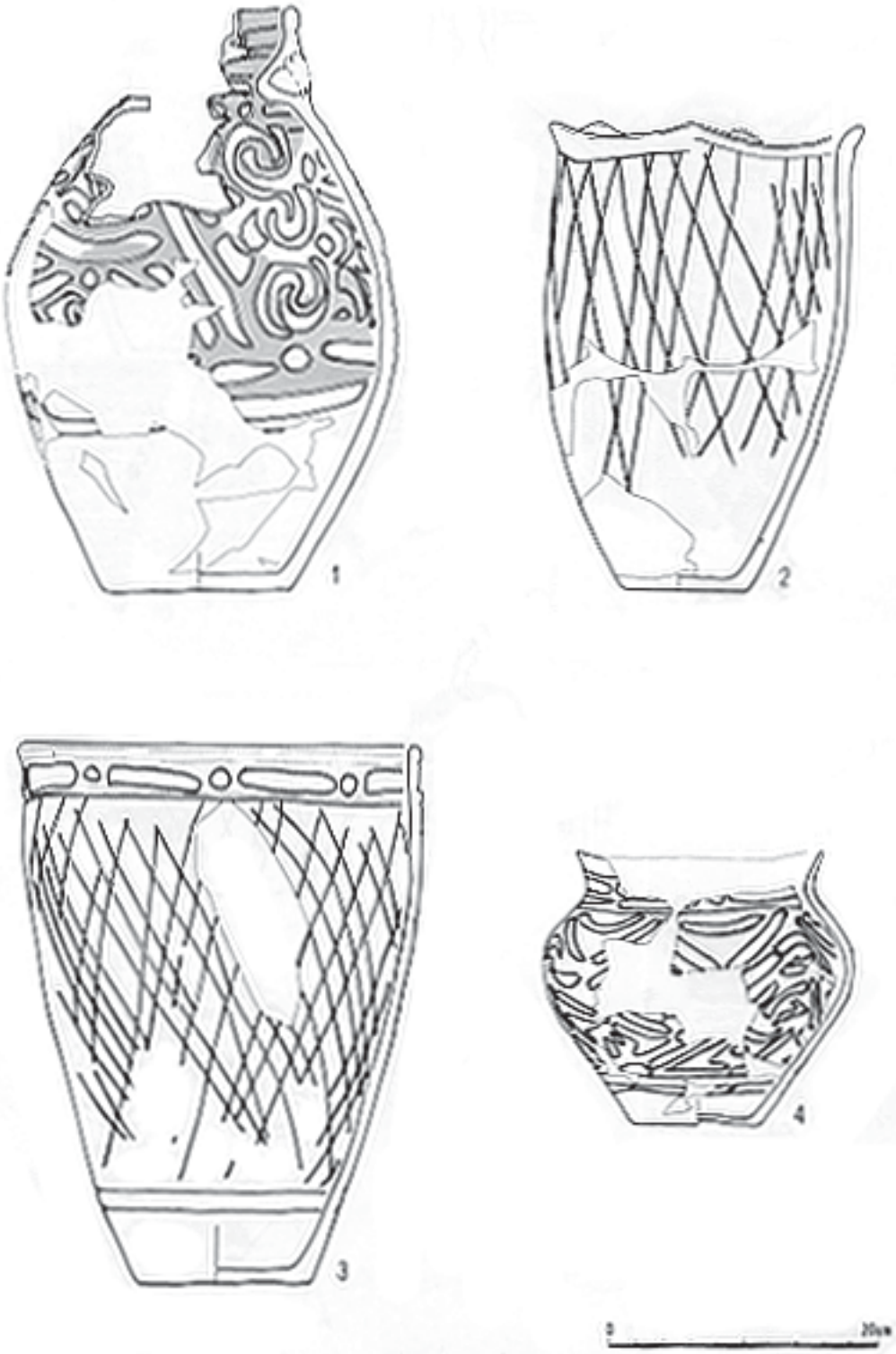
土器の出土状況を見ると、環状列石中央の平場からはほとんど見つからないのに対し、環状列石の外からは多量に見つけられることが設定した3本のトレンチを調査してわかりました。特に、環状列石から約20m離れたBT5～9に土器片が集中し、本遺跡から見つかった土器のほとんどの器形が見られます。その中でも甕棺土器の破片は相当量見つかってあり、見つかった状況も、土壙を覆うようなもの、土壙の中などから見つかっています。CT4から見つかった甕棺土器も環状列石から約20m離れた地点で土壙付近から見つかっています。

今回の調査で見つかった土器は、ほとんど環状列石の外からで、全体的に深鉢形土器などの日常生活用の土器が少なく、再葬用の甕棺土器や浅鉢形土器などの祭祀的な要素が強い土器の比率が高く、集落跡等の遺跡とはだいぶ様相が異なります。このことは、環状列石が祭祀的要素を含む墓域であるということを裏付けるものといえます。

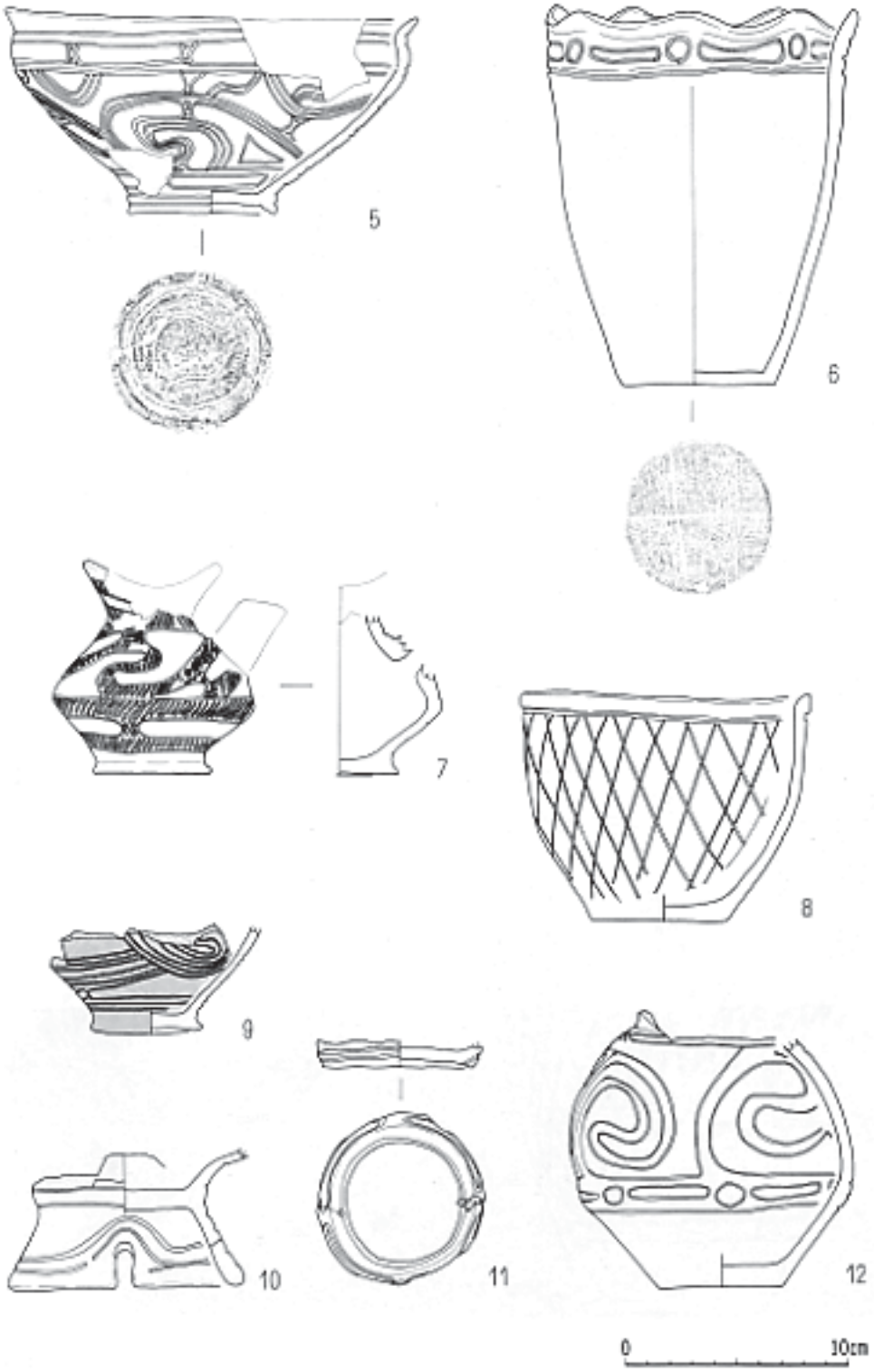


注口土器　　甕棺土器

Fig8　出土状況

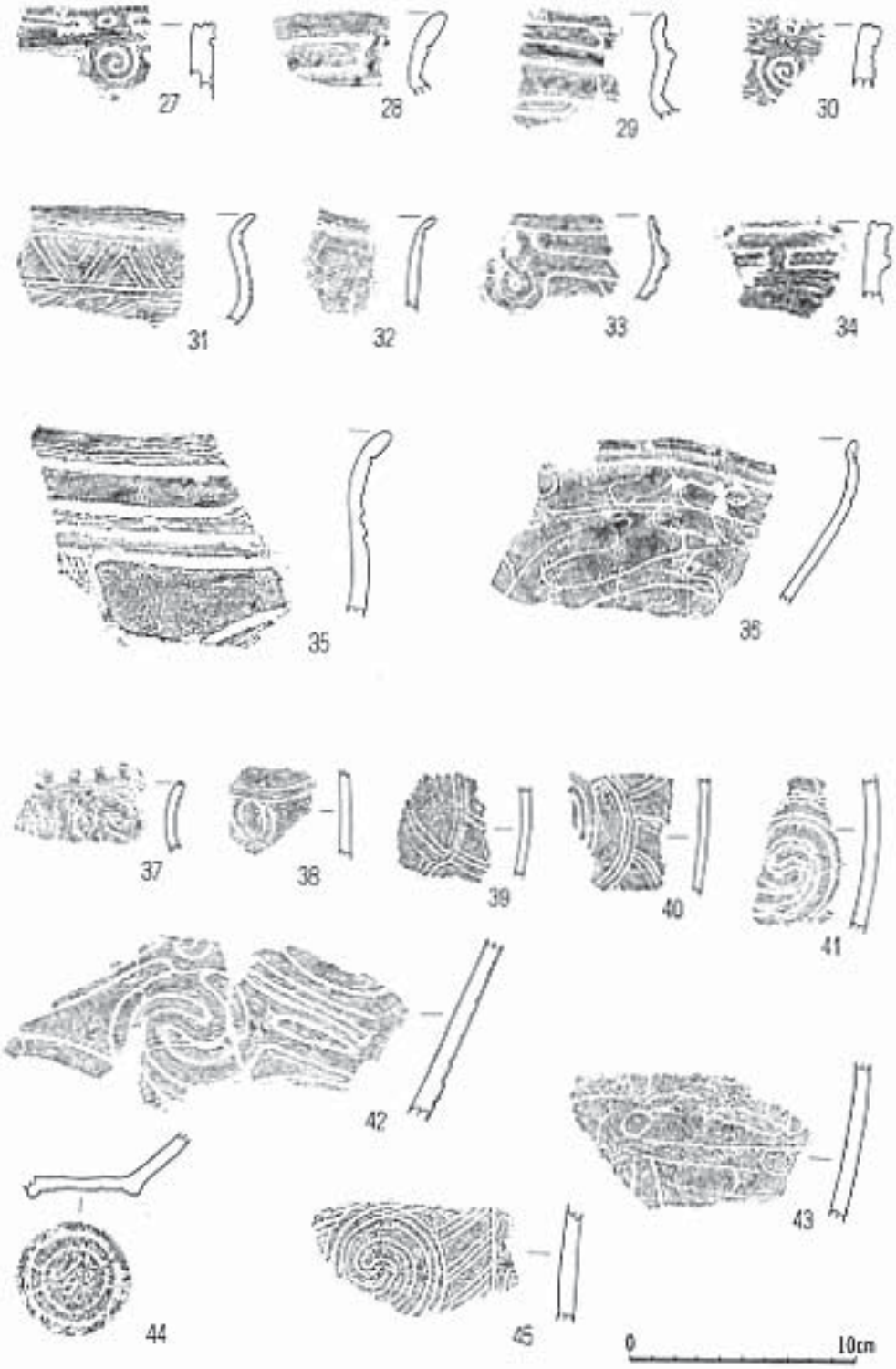


第8図　縄文土器（1）



第9図　縄文土器（2）

第10図　縄文土器（3）



第11図　縄文土器（4）

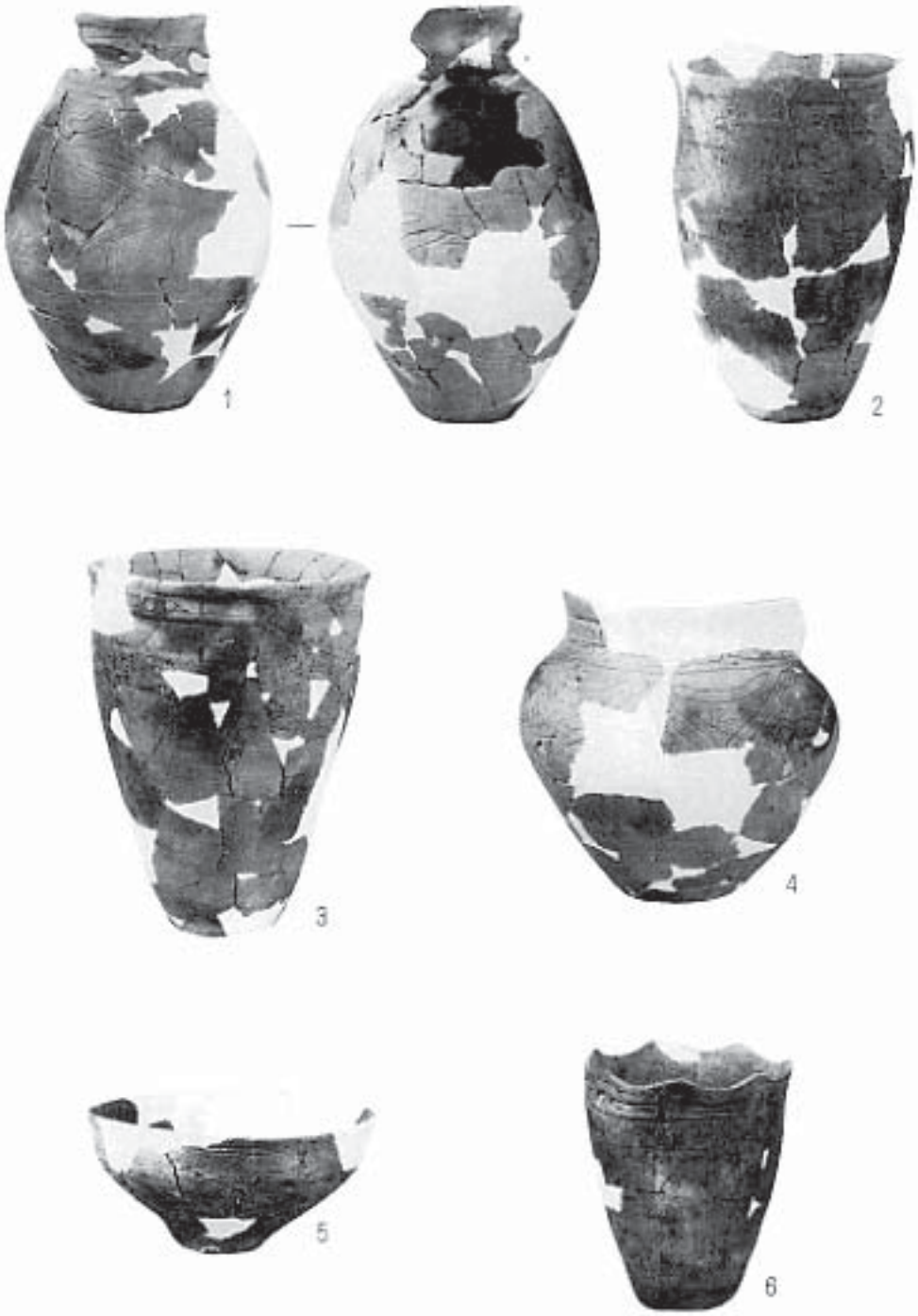


Fig9 縄文土器（1）

Fig10 縄文土器（2）

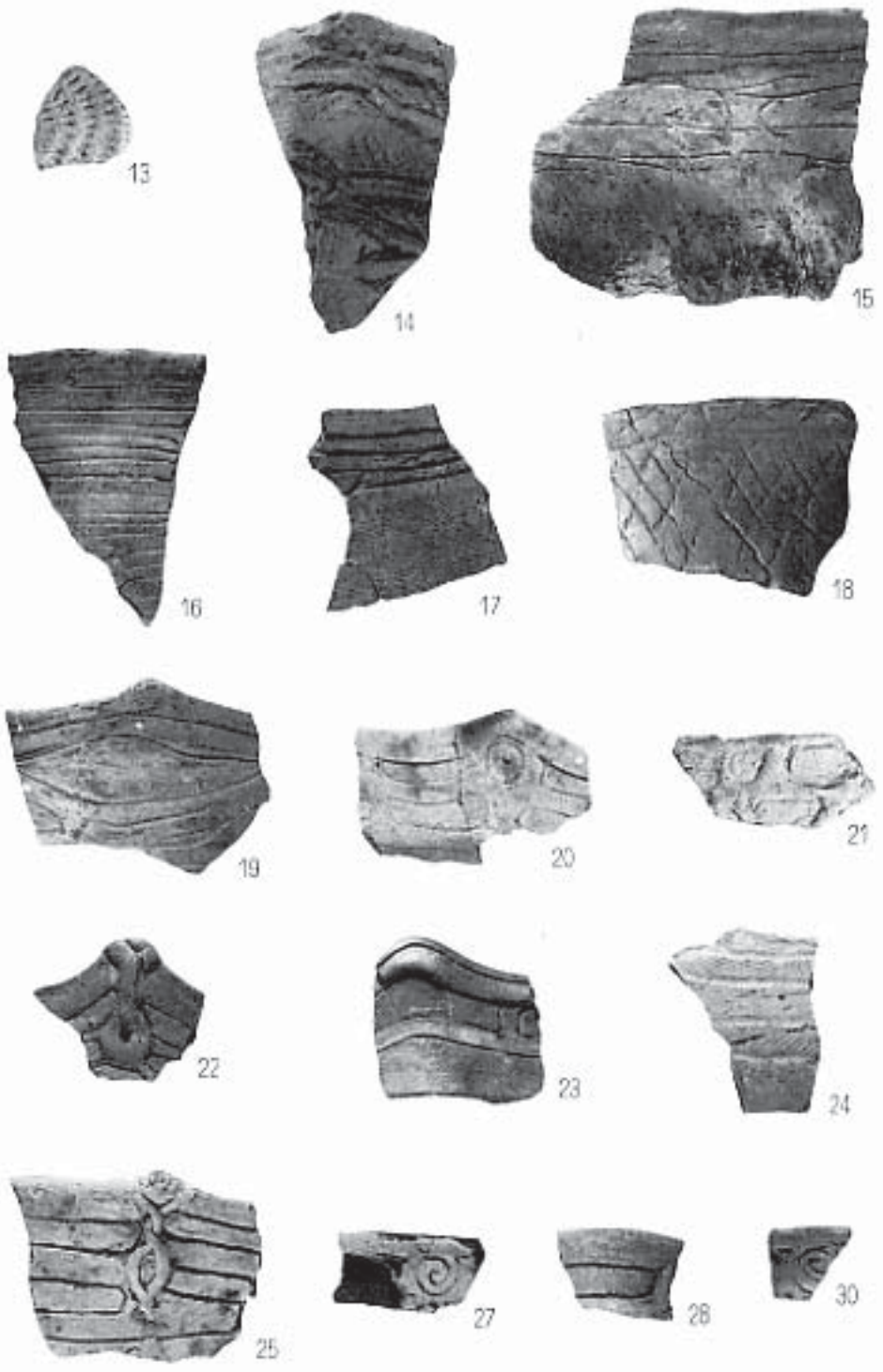


Fig11　縄文土器（3）

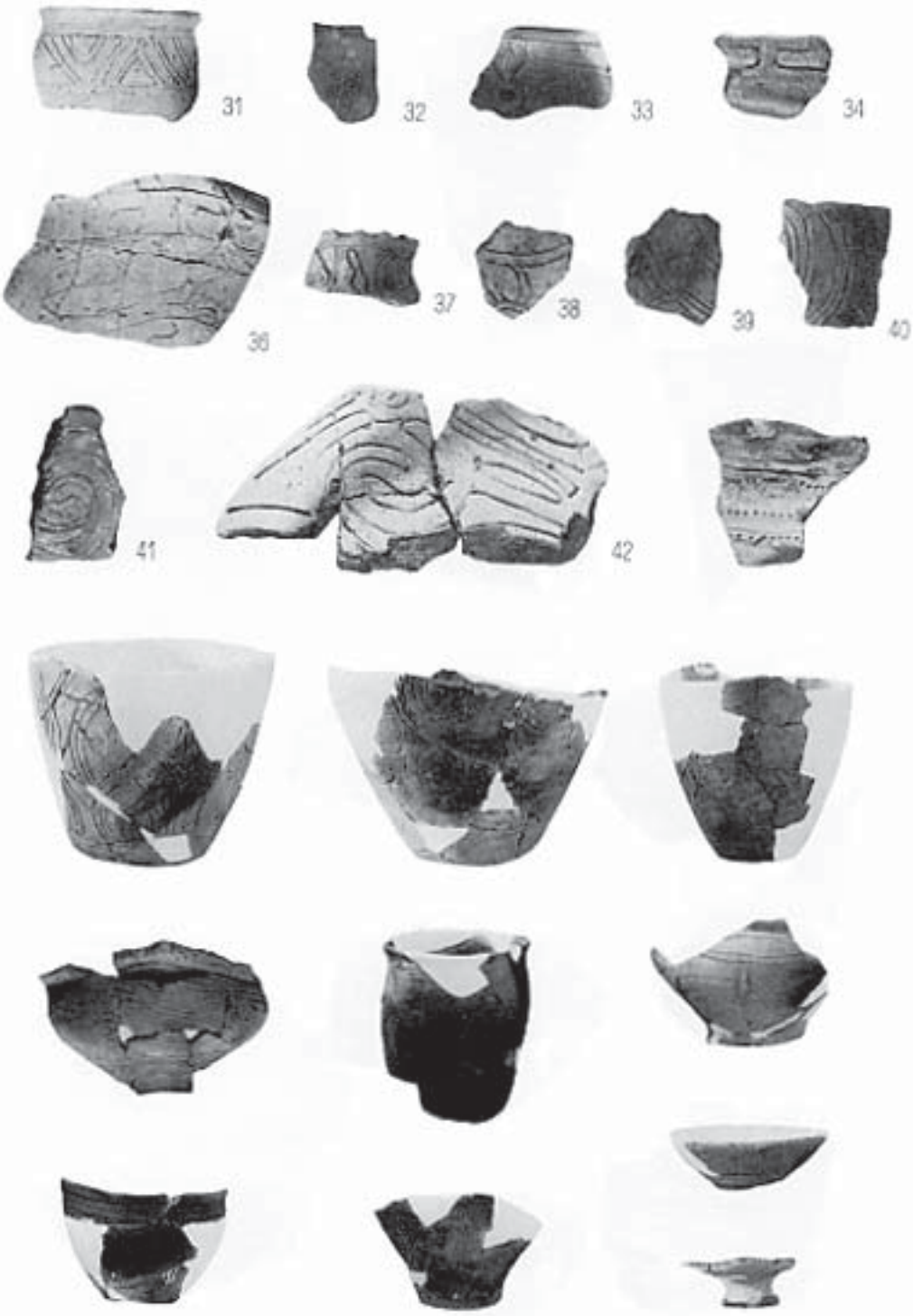


Fig12 縄文土器（4）

続　縄　文　土　器（第13，14図）

約2300年前、大陸から金属や稲作が伝わりました。やがて本州では狩猟・漁労・採集生活を主とした「縄文時代」が終焉を迎え、農耕生産を主とした「弥生時代」が始まりました。しかし、津軽海峡を越えた北海道では、寒冷な気候条件や食料源である動・植物が豊富であったことなどから稲作は行われず、縄文時代と同じ生活が続いていました。このことから北海道では弥生時代と呼ばず、「続縄文時代」と呼んでいます。

続縄文文化には、縄目の文様が多用され、帯縄文・縞縄文など特有の文様が施された土器、金属器の導入、特殊な石器の存在などが見られます。地方別に見ると、道南地方では亀ヶ岡式土器を母胎として成立した青森県の弥生式土器の影響を受け、発展した「恵山式土器文化」が、道央地方では土着の土器が盛行した「後北式（江別式）土器文化」がそれぞれ広がりました。やがて、続縄文時代後半になると恵山文化は衰退し、後北文化が全道に分布を拡大していきました。

この時期、東北地方にも後北C_2－D式と呼ばれる土器を中心に後北式土器が現れるようになり、特に青森県・岩手県において数多くの発見例が報告されています。青森県内では20カ所以上の遺跡から見つかっており、後北式の南下ルートは、下北半島または津軽半島から入り、それぞれ南下していったと考えられ、遠くは新潟県から見つかっています。

本遺跡から、磨消縄文や沈線文を主体とした恵山式の特徴を持った土器と隆起線文や列点文を主体とした後北式の特徴をもった土器がごくわずかな調査面積からダンボール1箱分見つかっています。

恵山式土器は、恵山文化末期頃に現れる南川IV群と呼ばれる土器（1～16）であり、後北式土器は、後北式の古い段階から後北C_1式と呼ばれる土器（19～31）まで見つかっています。また両土器の特徴を持ち合わせた土器（17，18）も見つかっています。器形は、□縁部は平縁または四つの小突起

第2表　続縄文土器型式の編年（加藤邦雄1992より一部改編）

	東　　北	道　　南	道　　央
縄文	（大　洞） 大洞A，A´	（大洞系） 日ノ浜	（非大洞系） タンネトウL
弥生時代（続縄文時代）	砂沢 五所・二枚橋 宇鉄II・井沢 田舎館1 田舎館2 念仏間・大石平I 天王山	下添山 西桔梗B2 南川III 南川IV	ママチ 大狩部 江別太7層 江別太6層 江別太5層 江別太1 江別太2 江別太3 後北B 後北C1 後北C2-D

起をもったもので、若干外側に反り、胴部が張り出し、底部がすぼまっている釣鐘を逆さにしたような形をしているものが大半を占めます。すべて底は上げ底であり、□唇部には刻み、刺突を施しているものが目立ちます。

これらの土器と共に出土した遺物は、続縄文時代特有の靴形石器（第15図7，8）・石鏃（築15図3）・管玉状土製品（築17図16）などが見つかっています。遺構はまだ見つかっていませんが舌状の出入り□がついた続縄文時代特有の住居跡などが見つかるかもしれません。また、石器を作り出す石や石器を作り出すときにでる破片などが数多く見つかっていることから、この付近は石器工場であったかもしれません。さらに、環状列石南側の配石（策2図10，11）は、続縄文時代の配石の可能性があります。

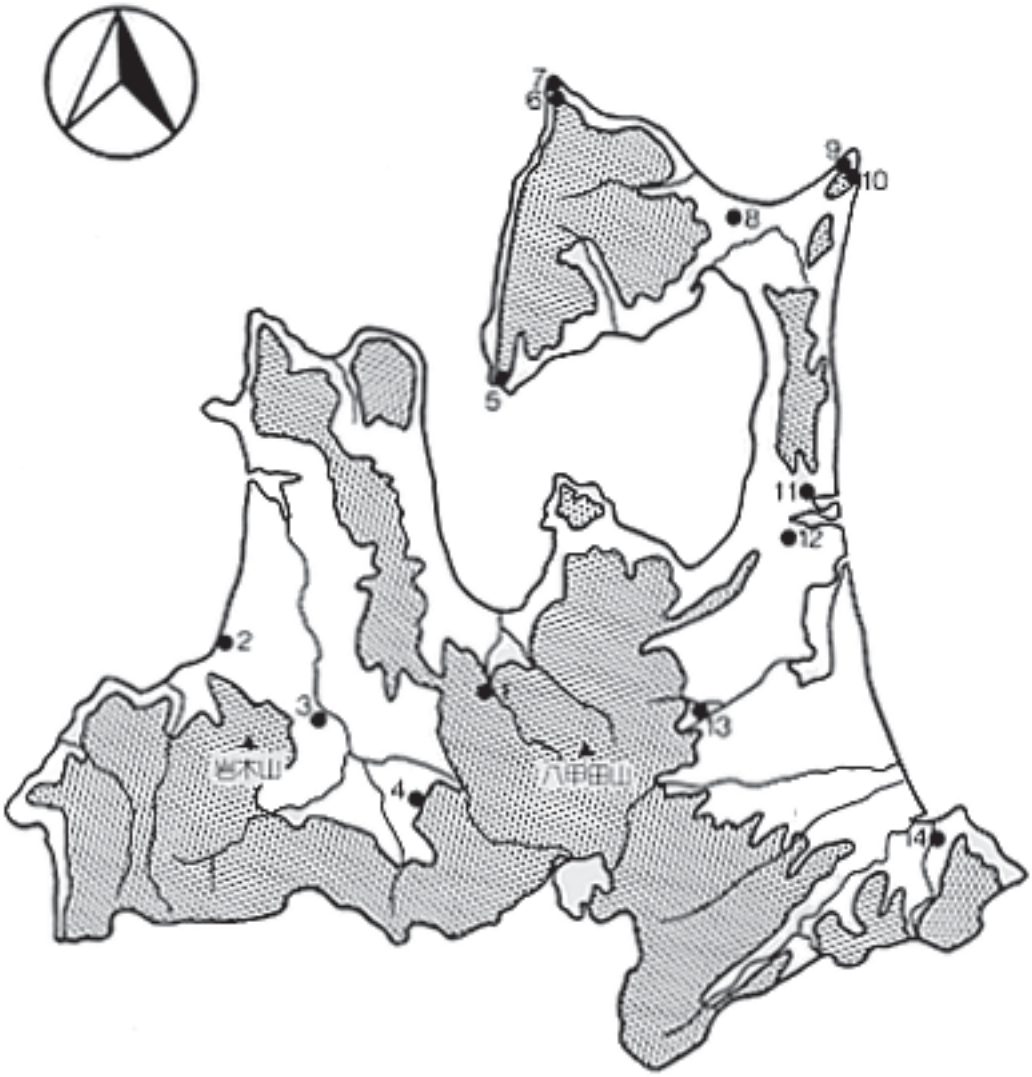
北海道では南川Ⅳ群土器と後北B式土器は同時期に存在していたと考えられていますが、後北C_1式土器と共伴して見つかった報告例があることから、本遺跡から見つかったこれらの土器は、時間の幅があるのか、または同時期に存在したものなのかは現時点でははっきりしていません。ただし、平成元年度の調査では、火山灰を挟んで下層に沈線文を主体とした土器が、上層に隆起線文を主体とした土器が見つかっていることから、時間幅があった可能性が強いと思われます。また、東北地方で見つかる後北C_2－D式土器は、北海道のものと判別が困難なほど類似していますが、本遺跡の土器は若干、表現方法・調整などが北海道のものとは異なっており、移入品というよりはこの地で作られたものと思われます。

現在でも地表面に頭部を露呈している環状列石ですが、約2000年前の続縄文時代ではさらに列石が見えていたことでしょう。このような特別な地を選んで居住した続縄文時代の人々はどのような考えのもと、この地で生活を営んだのでしょうか。やはり特別な地として、祭り事などを行ったのでしょうか。今後の調査が進むことによって少しずつ明らかになっていくものと思われます。

配石と続縄文土器　　拡大

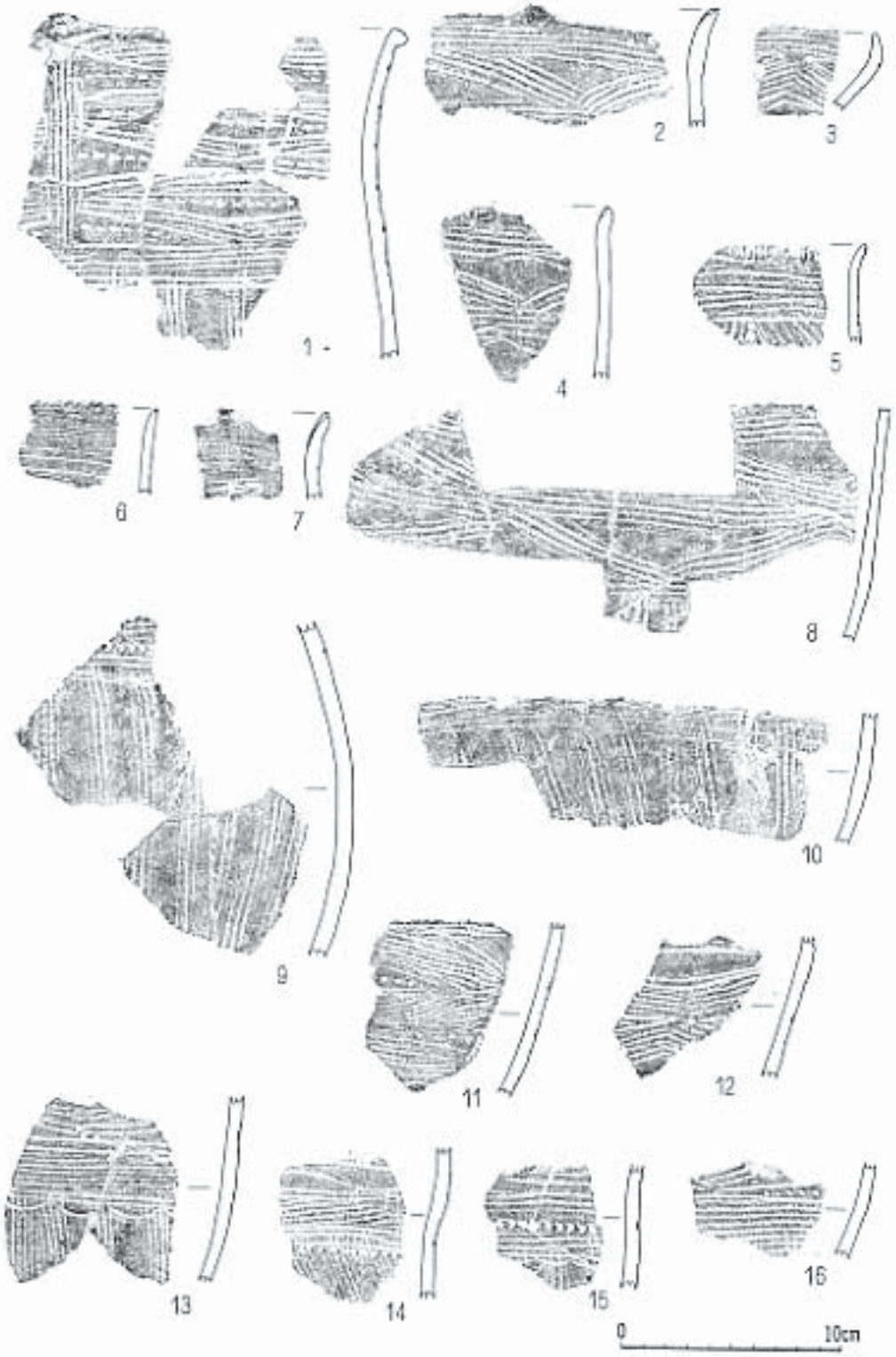
Fig13 出土状況

青森県内の主な続縄文時代の遺跡



1	小牧野	（青森市）	9	大平Ｄ地点	（東通村）
2	神　田	（木造町）	10	浜尻屋	（東通村）
3	小　友	（弘前市）	11	上尾鮫（2）	（六ヶ所村）
4	鳥海山	（平賀町）	12	千歳（13）	（六ヶ所村）
5	九艘泊	（脇野沢村）	13	作　田	（七戸町）
6	大　間	（大間町）	14	塩　入	（八戸市）
7	烏　間	（大間町）			
8	関　根	（むつ市）			

第 12 図　遺跡位置図



第13図　縄文土器（1）

第14図　縄縄文土器（2）

Fig14　縄縄文土器（1）

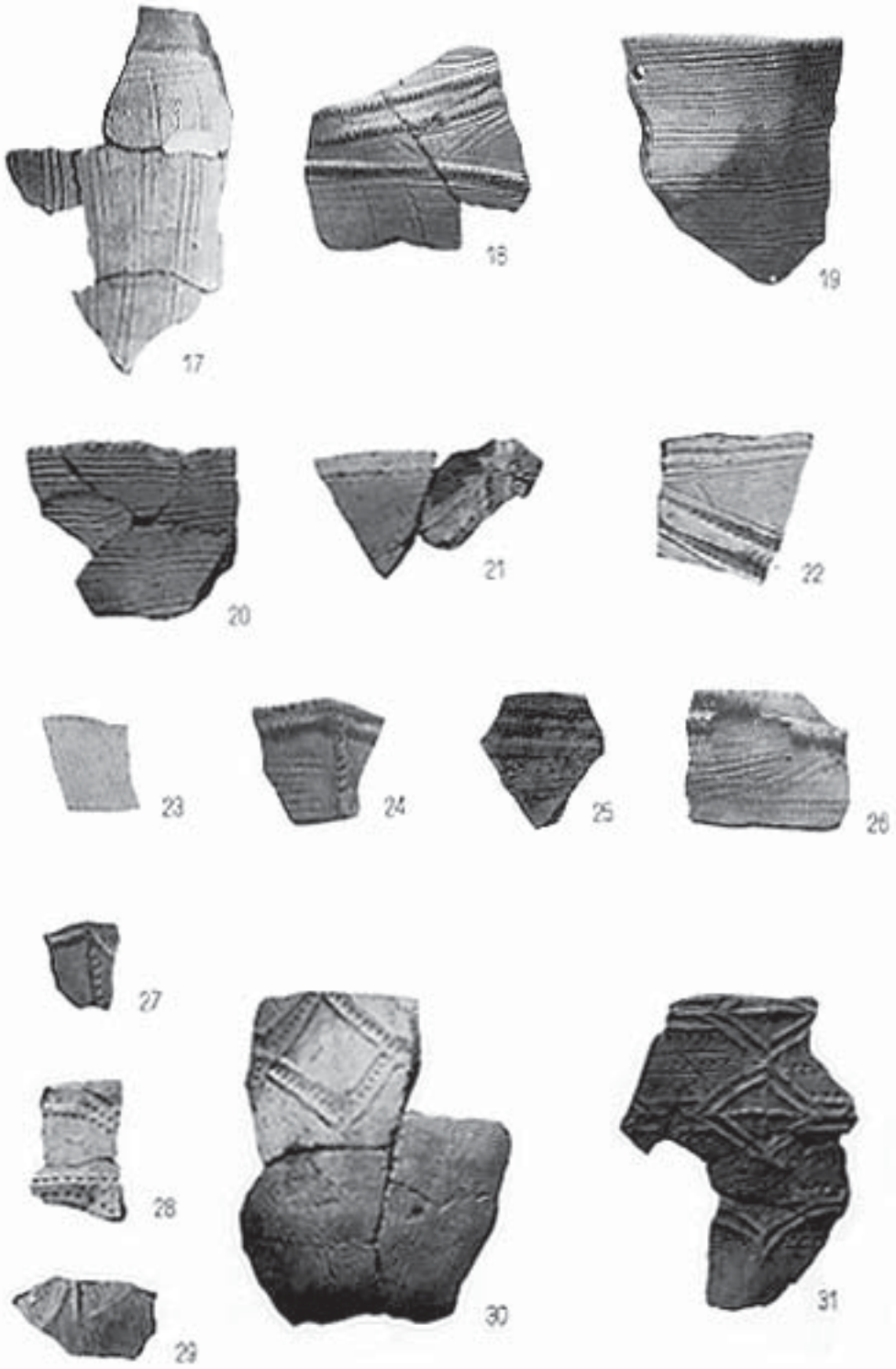


Fig15 縄縄文土器（2）

石　　器（第15，16図）

石器は、石鏃（1～3）・石槍（6）・靴形石器（7，8）・石錐（4）・石ベラ（5）・石匙（9，10）・打製石斧（11）・磨製石斧（12，13）・くぼみ石（16）・すり石・たたき石・石錘（17）・石皿（14，15）・砥石などが見つかっています。

石鏃は有茎鏃（1，2）と無茎鏃（3）が見つかっています。本遺跡では、有茎鏃は縄文時代後期、無茎鏃は続縄文時代に伴う傾向があります。

続縄文文化の土器に伴う石器に、靴形石器・靴形石匙と呼ばれるナイフがありますが、本遺跡からもこの靴形石器が見つかっています。縄文後期の石器とは剥離調整の方法が大きく異なっています。

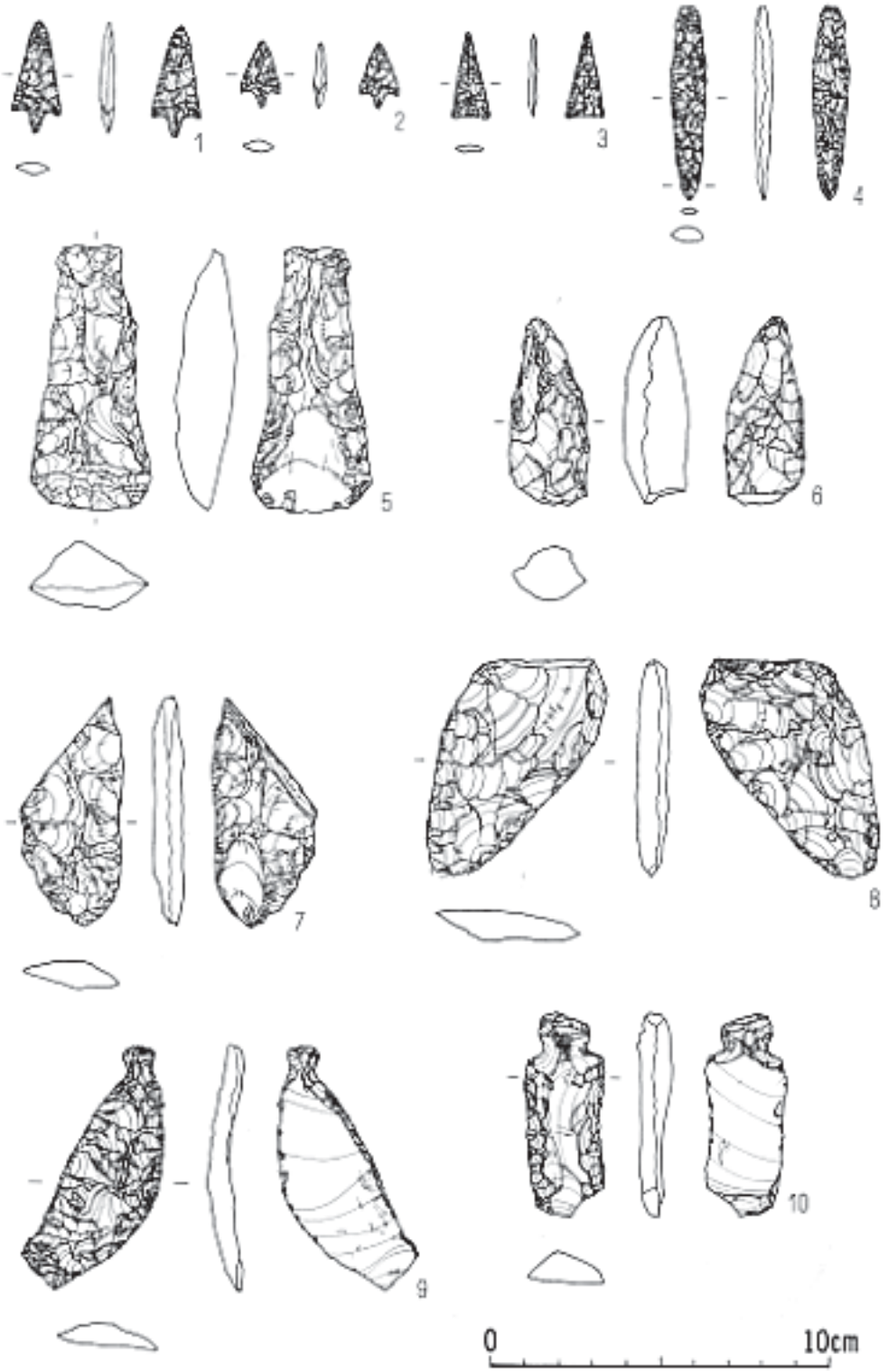
石皿は縄文後期のもので、14は細長い楕円形をしており、現存部で長軸20㎝、短軸12㎝、厚さ2㎝あり、所々に朱の痕跡が見られます。石皿の両面は植物などをすり潰した使用痕が見られ、端部に動物と思われる彫刻が刻まれています。この石皿はBトレンチから注□土器などと共に出土していることから、何らかの祭り事に使われたものと思われます。また、15は現存部14㎝、厚さ2．5㎝あり、全面を丁寧に磨いており、端正な美しさがあります。この石皿は環状列石東側の小規模な直線状配石の端から見つかっています。

打製石斧は縄文後期のもので、長さ20㎝あり、両端をノミ状に剥離調整しています。この石器は打製石斧としてここでは扱っていますが、あまり類例のない貴重な資料です。

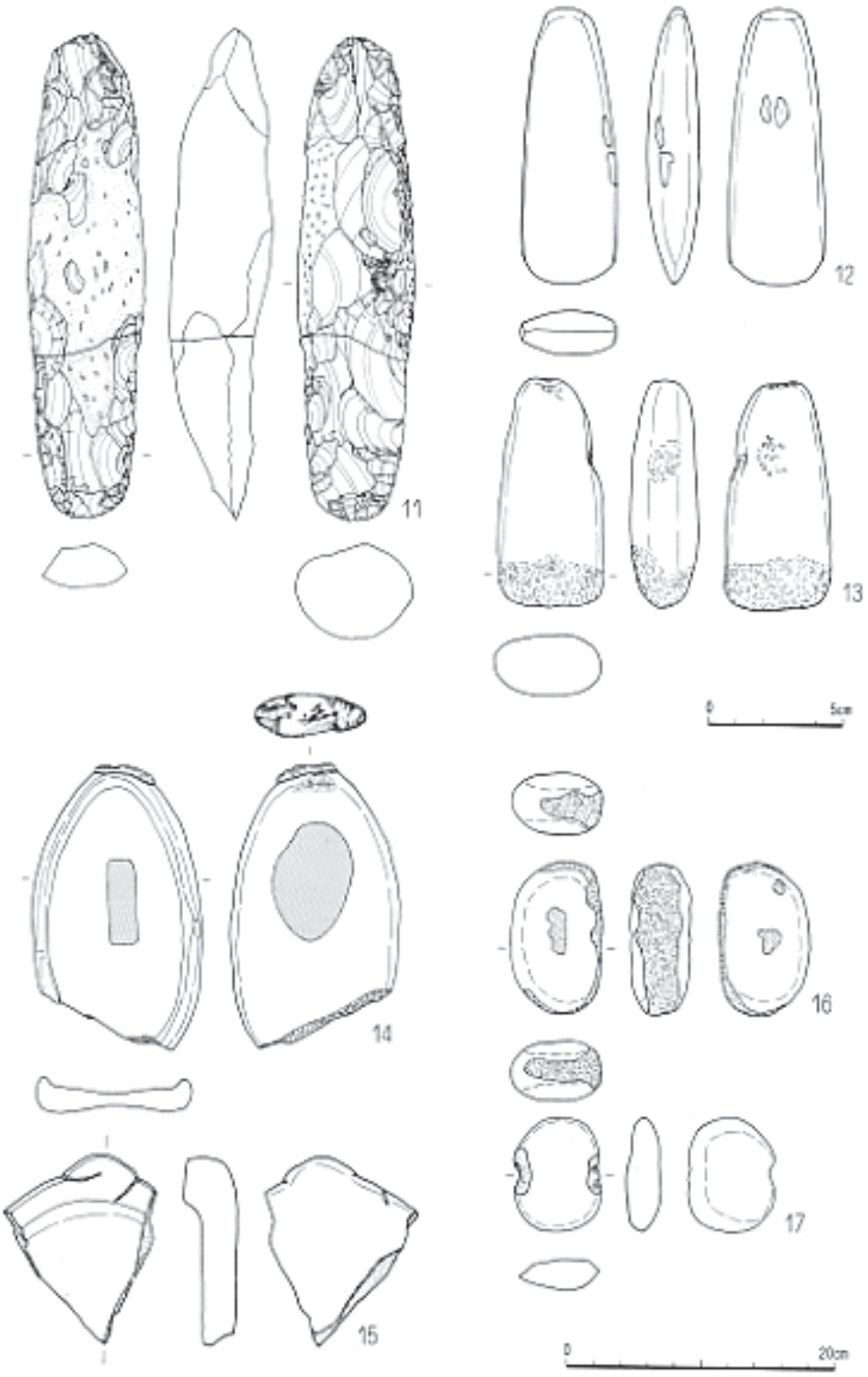
石器の出土状況を見ると、環状列石からはほとんど石器類は見つからず、特に狩猟関係の石器類は全く見つかっていません。しかし、列石外側になると石器類が多量に見つかることから列石内部は聖域として存在したものと考えられます。また、祭祀的な石皿など特殊な石器類の出土も環状列石の性格に関係するものと思われます。

石皿　　打製石斧

Fig16　出土状況



第15図　石器（1）



第16図　石器（2）

Fig17 石器（1）

土　製　品・石製　品（第17，18図）

今回の調査で見つかった遺物の中には、土器や石器以外に土製品や石製品が含まれています。

土製品・石製品は、土偶・土器片再利用土製品・鐸形土製品・靴形土製品・ミニチェア土器・腕輪・耳飾り・垂飾品・三角形岩版・円盤状石製品など見つかりました。

土偶（18）は平面の形が十字形をしており、両腕は簡略化されています。下半身は欠損していますが、目・口・鼻・眉毛・結髪の様子もはっきりと認められ、乳房の盛り上がりと腹部のくぼみも認められます。肩部から脇に分けて貫通孔があります。

鐸形土製品（1～3）は文様がないものと、沈線文で施文したものがあります。また、つまみの部分に貫通孔があるものと、ないものがあります。

靴形土製品（13）は器面全体に沈線による渦巻状の文様が施文されていて、見方によっては、動物の顔のように見えます。つまみ部分には貫通孔があります。

ミニチュア土器（4～6）はユリの花弁のような器形をしているもの（4）が見つかりました。口縁部には6つの突起があり、器表面には線刻が認められます。

腕輪（14）は完全なものではありませんが、推定径は約5cmです。縄文と沈線文で施文されています。

耳飾り（15）は滑車のような形をしていて、中心に貫通孔があけられています。

土製垂飾品（17）は二等辺三角形のような形をしていて、頂点付近に底辺に平行するように貫通孔があけられています。

石製垂節品（23）は楕円形の自然礫に紐を通すための貫通孔をあけています。

三角形岩版（19～22）は表面を凸状に、裏面を平らに磨いています。凸状の表面には線刻が施されているものがあり、また、頂点を打ち欠いているものも数多く見つかっています。

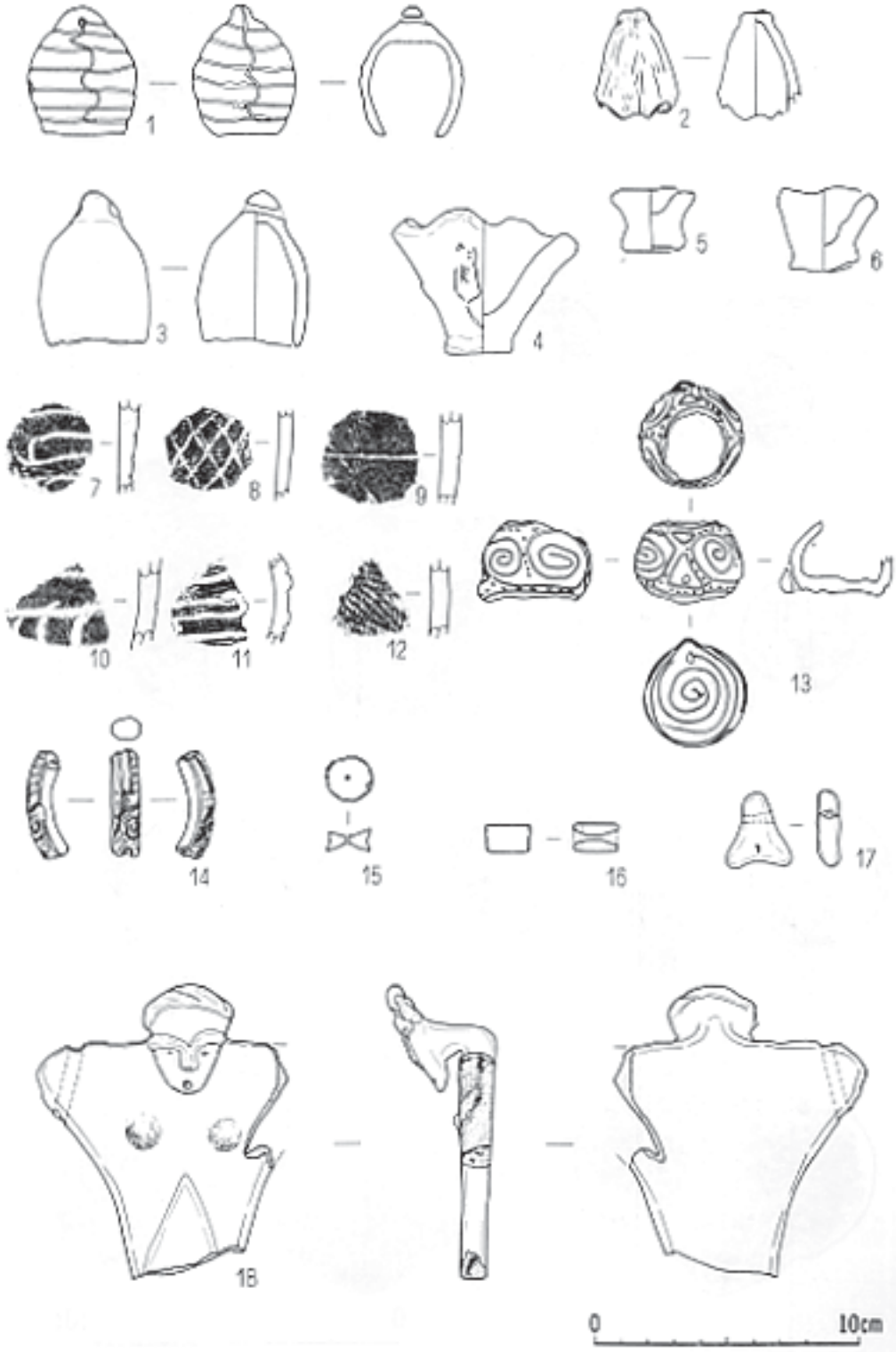
円盤状石製品（24～31）は偏平な石の輪郭を打ち欠いたり、研磨して円盤状にしています。

線刻のある石（32）は自然礫に線刻によって動物らしきものが描かれています。頭・角・4本の足・尾が確認できます。

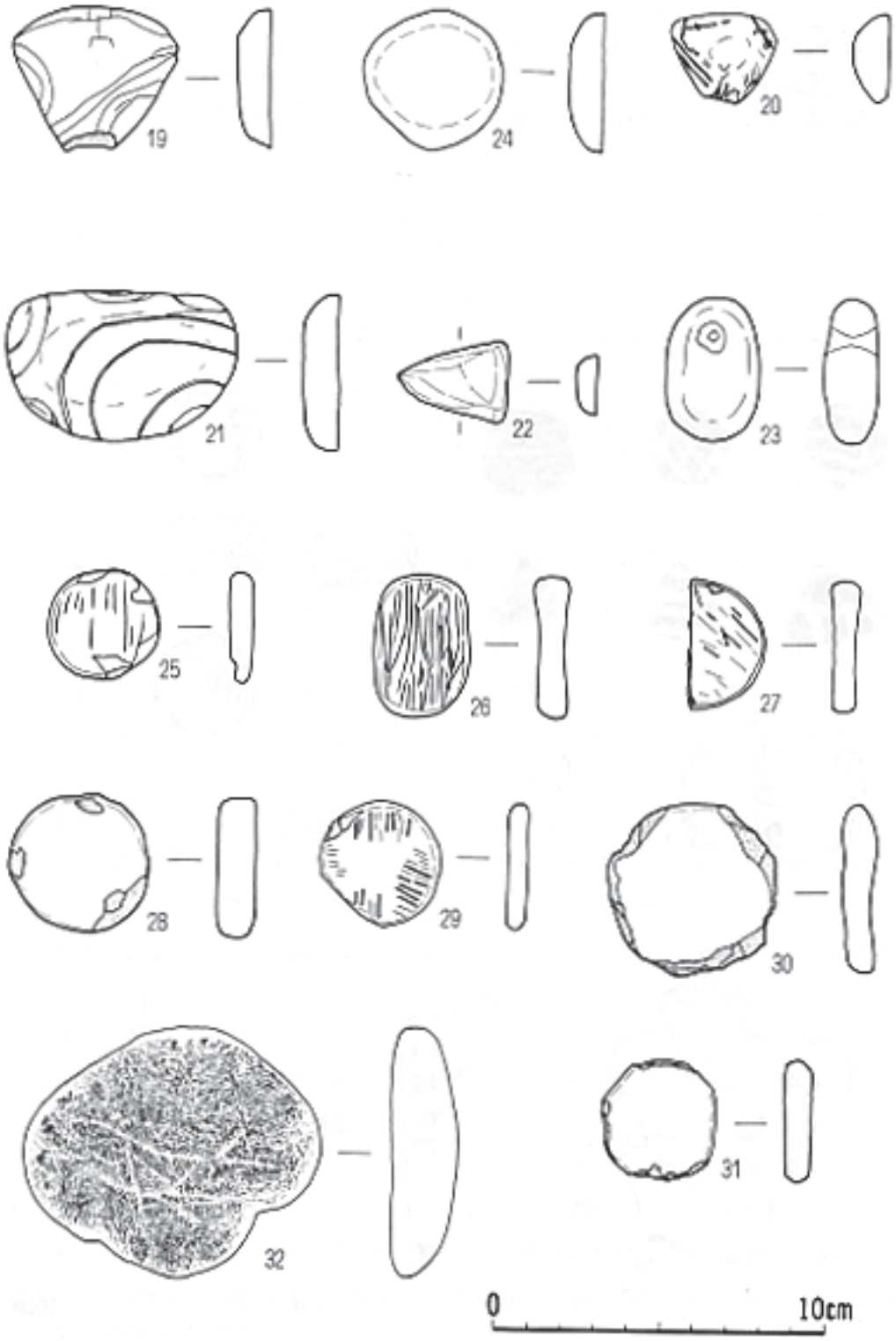
以上は、伴出した土器などから縄文時代後期のものと思われますが、管玉状土製品（16）は、出土地点などから続縄文時代の遺物と思われます。

これらの遺物の出土状況を見ると、大半がBトレンチに集中し、特に三角形岩版・円盤状石製品・靴形土製品は土壙内から見つかったものもあり、副葬品的なものと思われます。

土製品・石製品は祭祀等の精神的なものに使用されたと思われますが、これらの遺物は、環状列石という持殊な遺構のためか、集落跡などの遺跡と比較すると見つかる率が高く、このことは本遺跡の特徴といえます。



第17図　土製品・石製品（1）



第18図　土製品・石製品（2）

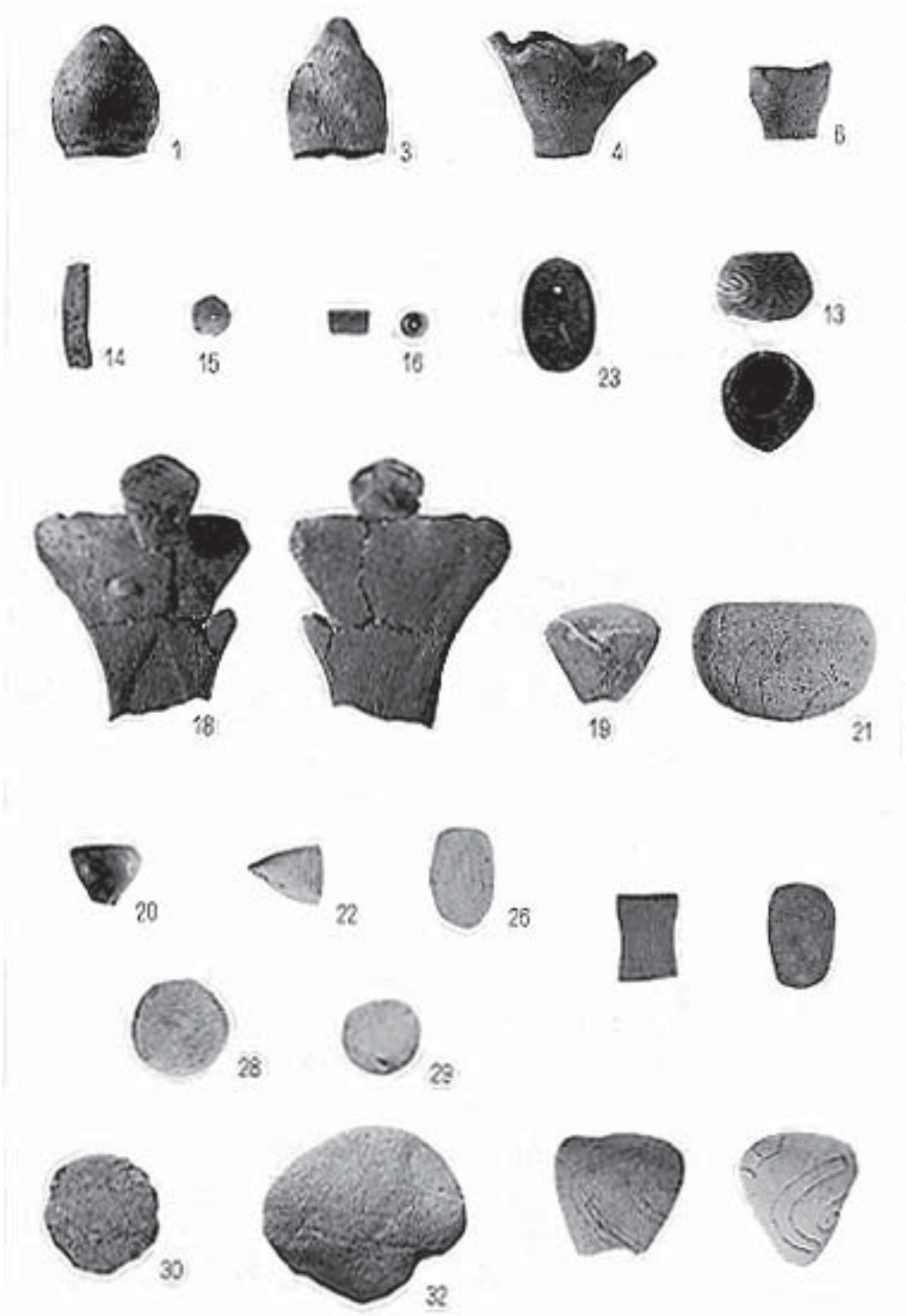


Fig18 土製品・石製品（1）

ま　と　め

以上が平成4年度までの小牧野遺跡発掘調査の概要です。これまでの調査によって小牧野遺跡の全体像が少しずつ分かりかけてきました。それでは、今までの調査成果をふまえて、環状列石を中心とする小牧野集落について考察してみたいと思います。

環状列石は、一般的には平坦な地表面に作られます。そして、その周囲に土壙などの遺構を環状に配置していきます。しかし、本遺跡の環状列石は台地の縁ぎわの斜面を大規模に削るという大土木工事までして作られており、遺構は環状列石より低い東側、それも崖の手前に集中し、その配置にも規則性があります。さらに、内帯と外帯の間から埋められた3個の甕棺土器が見つかっています。

これらは何を意味しているのでしょうか。環状列石を作る位置とその周囲の遺構の配置には集落ごとに何らかのきまりがあったのではないのでしょうか。さらに、環状列石は遺構が集中している側に向くように作られ、そこからは多量の遺物、特に祭祀的な遺物が見つかっていることは、小牧野集落の人々が環状列石を仰ぎ見ながら祭り事を行ったのではないのでしょうか。また、埋葬用の甕棺土器が見つかっているということは、環状列石が墓であるということを裏付ける証拠の一つとなるものです。

大規模な環状列石は、完成するまでに幾年もの年月がかかったと考えられています。しかし、本遺跡の環状列石は、その大土木工事にもかかわらず、組石の統一性から短期間に作られた可能性があります。この環状列石を作り上げるには、小牧野集落の人々だけではなく周辺の集落の人々を含めた共同作業で行われたと考えられ、その大集団を指揮できる指導者が存在したものと思われます。

居住区域に関しては、他の環状列石及び環状集落では中心となる環状列石や広場からかなり離れた地点に居住区域が位置していることから、小牧野集落の居住区域は他と同様に環状列石からかなり離れた地点にあるものと思われます。また、大湯環状列石は、90mの距離をおいて、ほぼ同一形態の2個の環状列石で構成されていますが、本遺跡も調査範囲を広げることによって新たな環状列石が見つかる可能性もあります。

さらに、本遺跡から見つかっている続縄文時代の土器は、青森県内では最も古い部類に入り、貴重な資料といえます。東北地方では続縄文時代の遺物に伴う遺構は土壙墓が見つかっているだけで、住居跡などはまだ見つかっていませんが、本遺跡から住居跡などの遺構が見つかる可能性があります。

小牧野遺跡の環状列石を中心とする集落の性格の解明は、今後の発掘調査によって明らかになっていくものと思われます。

現地見学会

作業風景

馬頭観音碑と露呈する石

Fig19

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993『小牧野遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第20集

市内遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成5年3月31日

発　　行　青森市教育委員会

〒030　青森市中央一丁目22－5

TEL　0177－34－1111

印　　刷　東北印刷工業株式会社

〒030　青森市本町二丁目11-16

TEL　0177-75-1431